

2024年1月5日

みずほディーラーズアイ (2024年1月号)

みずほ銀行

目次

米ドル相場	2	韓国ウォン相場	9
ユーロ相場	4	台湾ドル相場	10
英ポンド相場	6	香港ドル相場	11
豪ドル相場	7	中国人民元相場	12
カナダドル相場	8	シンガポールドル相場	13
		タイバーツ相場	14
		マレーシアリング相場	15
		インドネシアルピア相場	16
		フィリピンペソ相場	17
		インドルピー相場	18

* 見通しは各ディーラーのビューに基づきます。

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。

米ドル相場

予想レンジ: USD/JPY 138.00 ~ 145.00

金融市場部 為替営業第二チーム 上遠野 暁洋

■ 先月の為替相場

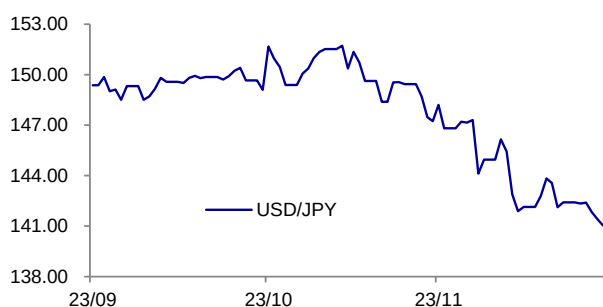
12月のドル/円は下落し、一時4か月半ぶりに141円を割り込む展開。

月初1日、148円前半でオープンしたドル/円は、米11月ISM製造業景気指数の下振れや、パウエルFRB議長の発言「(政策金利は)かなり引き締めの領域に入っている」を受けて146円半ばまで下落。翌週5日、米11月ISM非製造業景気指数の強い結果を受け、147円台で底堅く推移。7日は植田日銀総裁の「年末から来年にかけて一段とチャレンジングな状況になる」発言を受け、前日の氷見野日銀副総裁の発言も相まって、マイナス金利解除観測の高まりから円金利が急上昇し、円が買われドル/円は146円付近に下落。海外時間も円買いが続くとドル円は141.60円に急落後、引けにかけては144円付近に水準を戻した。8日、米11月雇用統計の堅調な結果やその後の米金利上昇を受け144円台後半まで上昇。翌週11日も145円台後半へ上昇し、日銀のマイナス金利解除に関し、12月会合での実施を否定する観測報道がなされると、146円台半ばに続伸した。12日は米金利低下を背景に145円台前半に下落し、13日には注目されたFOMCにおいて総じてハト派な結果となると、米金利低下を背景に、14日にかけて一時141円割れまで続落。その後は142円台前半まで反発し、15日はウィリアムズNY連銀総裁の利下げ観測けん制発言で142円台半ばまで上昇した。翌週初18日、複数のFRB高官によるタカ派な発言を受け、一時143円台に。19日、日銀が大規模金融緩和の現状維持を決定後、143円台後半に急伸。植田日銀総裁の会見前後には荒く上下も、早期のマイナス金利解除が見込みにくくなったことを受け円売りが加速し、144円後半に上伸。20日は143円台後半を中心にレンジ推移し、21日は内閣府による物価見通しの引き上げを受け、一時143円を割り込み。さらに米7~9月期GDP(確報)の下方修正を受け、米金利が低下する中、142円ちょうど付近まで続落。翌週初25日・26日のドル/円は海外主要市場が軒並み休場となる中、142円半ばを中心に方向感なく推移。27日は米金利の低下に一時141円後半まで下落するも底堅く推移。28日、前日からのドル売りの流れを引継ぎ、一時月安値の140.27円まで下落するも、141円台まで反発。29日、月末の実需フロー主導で141円後半まで上昇する展開となった。海外時間には140円台まで値を下げる局面もあったが、141円ちょうど近辺で取引を終えた。

年明け1日に発生した能登半島地震の発生を受けた日銀による早期マイナス金利解除への思惑の後退、さらに米金利が上昇する展開にドル/円は4日に143円台後半まで上昇した。

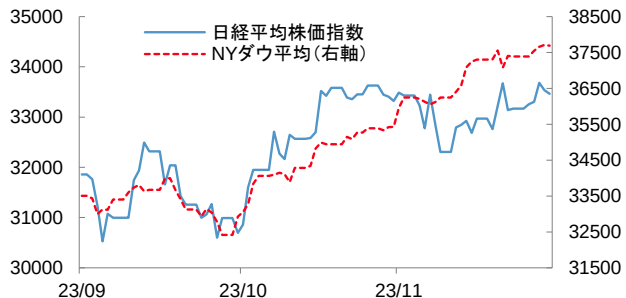
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/2	米ISM製造業景況指数	11月	47.8	46.7	46.7
12/6	米ISM非製造業景況指数	11月	52.3	52.7	51.8
12/6	米ADP雇用統計	11月	130K	103K	106K
12/8	米非農業部門雇用者数変化	11月	185K	199K	150K
12/8	米失業率	11月	3.9%	3.7%	3.9%
12/9	ミシガン大学消費者マインド	11月	62.0	69.4	61.3
12/12	米CPI(前年比)	11月	3.1%	3.1%	3.2%
12/13	米PPI(前年比)	11月	1.0%	0.9%	1.2%
12/14	FOMC政策金利	-	5.50%/5.25%	5.50%/5.25%	5.50%/5.25%
12/19	日銀政策金利	-	-0.10%	-0.10%	-0.10%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ドル/円 見通しまとめ

ブル	7名	146.00 ～ 141.00	ベア	9名	145.00 ～ 139.00
----	----	-----------------------	----	----	-----------------------

※ レンジは中心値

宮地	ベア	145.50 ～ 138.50	FRBのタカ派スタンスの軟化は、大きな転換点となる可能性大。これまでの被キャリー通貨としての円ショートポジション積み上がりは相応規模と想定される状況下、ドル円の上値の重い展開を予想。	松永	ブル	146.00 ～ 141.50	米国の堅調な経済状況やまだまだ十分に沈静化したとは言えないインフレの状況を踏まえれば、FRBが拙速な利下げに動くとは想定しづらい。先走った市場の利下げ期待が後退する形でドルが持ち直す展開を予想する。
河合	ブル	146.00 ～ 142.00	年初発表された米FOMC議事要旨では、景気抑制的な政策スタンスの「当面」維持が示唆され、また日銀の政策修正後ずれの思惑から、ドル円は、12月大きく円高が進んだ反動もあり、底堅い推移を予想。	田川	ブル	148.00 ～ 141.00	震災もあり、1月会合でのマイナス金利解除の実施の可能性は下がったと見る。外国人投資家中心に1月会合でマイナス金利解除を見込む向きは多からずいる模様で、期待が剥落すれば一旦円安か。
川端	ベア	145.00 ～ 140.00	12月のCPI以降に強まったインフレ鎮静化への期待感が支配的。指標次第でFEDの利下げ見通しに関する市場の織り込み度合に応じてドル高方向へのアンワインドや速度調整はあり得るが引き続き戻り売りがワーク。	上遠野	ベア	145.00 ～ 138.00	新年のテーマとして日米金融政策の転換や米国のリセッションリスクが一段と強調されやすく、基本線として金利差縮小をベースとした円高圧力が強まる展開を想定。
加藤	ブル	145.00 ～ 140.00	調整的なドル買いを予想。外国人の一部には本邦の政治日程から逆算すると日銀の何らかのアクションを一月に予想する向きもあるようだが、政府日銀はあくまで春闘を目標にしていると思う。	小林	ベア	145.00 ～ 137.00	マーケットにおける米利下げ織り込みが拡大し、米金利の低下を背景に足許ドル円は141円台まで値を切り下げる展開となった。年明けも引き続き米利下げ・本邦金融政策の方向転換をトピックに、下値を探る展開となるか。
山崎	ベア	143.00 ～ 139.00	ドル円は、下方向を予想。米金利の利下げが意識される中で、ドル安による円高か。日本の金融政策変更の可能性は足許では高まっていないと考えており、下押し圧力も限定的なものにとどまると予想。	鈴木	ベア	146.00 ～ 138.00	能登半島の地震の影響で日銀の政策修正観測は後退したもの、長い目で見た際のメインテーマは日米金利差の縮小で変わりはない。年初のフローをこなしながら、上値の重い値動きを予想する。
伊藤	ベア	145.00 ～ 140.00	想定外の北陸地震発生に日銀早期政策修正観測が後退し、年初から円売りが続いたものの、徐々に春闘結果を踏まえた日銀のマイナス金利解除への思惑は強まっていくだろう。米利下げが意識される中で、ドル円の上値は引き続き重い見込み。	大熊	ブル	146.00 ～ 141.00	FRBによる早期利下げは時期尚早との見方が浮上、堅調な米株もサポートとなり底堅さを取り戻すか。日銀の金融緩和長期化観測の台頭により円売りが強まりやすいこともあり、ドル/円は底堅い展開を予想。
尾身	ブル	146.00 ～ 141.00	今月も米国の高い政策金利の維持と、日銀の金融緩和政策維持によりドル/円はドル高円安傾向が維持されると予想。但し、米利下げへの思惑が強まっており上値は限定的か。	西	ベア	145.00 ～ 140.00	能登半島地震の影響を受けて日銀による政策修正期待が後退している一方、米国経済は強弱まちまち。物価と基準の好循環が確認され、日銀の政策修正期待は次第に高まるとみられるほか、米利下げも意識されやすく、上値は重い。
山口	ベア	145.00 ～ 139.00	日米金融政策への思惑に振られる展開継続を予想。米労働需給の逼迫が和らぎ、さらにインフレの鈍化が確認されると利下げ織り込みは進みドル安が継続すると予想。一方、日銀は能登半島大地震の被害を確認しながらの舵取りとなろう。	伊藤(基)	ブル	145.00 ～ 139.00	米金利は12月に入り低下基調を強めたが、やや過剰な動きにも感じられここまでの流れを巻き戻す展開を想定。また、震災の影響によって日銀が年度内にマイナス金利を解除する可能性も低くなった。こうした中ドル円は上昇するだろう。

ユーロ相場

予想レンジ: EUR/USD 1.0750 ~ 1.1250
EUR/JPY 153.50 ~ 160.00

金融市場部 グローバルFIチーム 田川 順也

■ 先月の為替相場

【12月のユーロ/米ドルは下落した後、上昇した】

1.0895で月初東京オープンを迎えたユーロ/ドルは緩やかながら下落。1.0820近辺にあった200日移動平均が意識されることがあったが、ECB高官から追加利上げを否定する発言が出るとこれを割り込んで下落。むしろ利下げ織り込みが進む展開に1.0800割れを見る。その後ラトビア中銀総裁から「2024年上期の利下げが必要ない」との火消し発言で反発する場面もあったが、戻りは売られ、8日の北米時間には1.0724の当月安値を示現。

2週目に入るとFOMC待ちにこう着後、ハト派据え置きの結果に米ドル全面安。ユーロ/ドルは1.0900レベルまで取引水準を切り上げる。注目されていたECBでは利下げの示唆がなかったことから、ユーロは急伸。一時1.1000の舞台を抜ける。週末にかけては達成感や独金利の低下を見ながら1.0900レベルまで調整。

3週目は独12月IFO企業景況感指数が事前予想比を下回り上値重い場面もあったが、結局じり高の展開。週後半は全般的なドル売りの展開にユーロ/ドルも上昇し、1.1000を回復。

最終週は年末で薄商いの中、横ばいの展開だったが、月末にかけて特段の材料がないにも関わらず7月以来となる1.1100を上抜け。28日に当月高値となる1.1139まで上伸。年末やや調整を挟み、1.1038で2023年の取引を終えた。

■ 今月の見通し

【1月のユーロ/米ドルは横ばいの展開を予想】

左記のようにECBは2会合連続で金利据え置きを決定。据え置き自体は事前予想通りの結果であったが、利下げの兆候が見られなかったことがサブライズとなった。金利を上げる訳ではないが、利下げ示唆を行ったFRBとの対比ではコントラストがつき、為替市場では相対的にユーロ買いで反応した。

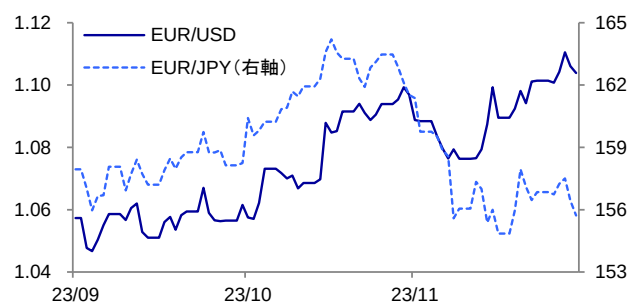
ただ、OIS市場を見ると、ECBのアナウンスに反して4月の会合までに政策金利の利下げが完全に織り込まれており、その上、2回の利下げについても50%程度織り込まれている状況である。目先の一か月間にこれ以上の利下げ織り込みが進む可能性は低いとして、論点は現状の利下げ予想が剥落するのか、というところに集約されそう。

利下げ予想が根強い背景としてまずはユーロ域内のインフレのピークアウト、加えて景況感の減速も強まっており、シンプルに「景気が悪くなってきている」というのが市場参加者の域内への見方がある。かかる状況では織り込んだ利下げ予想が剥落するシナリオも容易ではなさそう。利下げ期待が変わらないのであれば通貨ユーロのレベル感も大きくは変わらないだろう。月並みな表現になるが、「データ次第」。

併せて相手方であるドルが与える影響も重要。ECBとFRBのどちらが先に利下げをするか、の予想レースか。

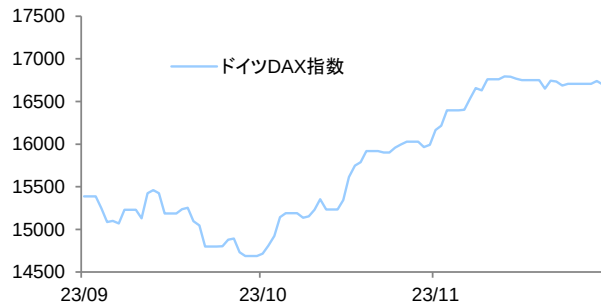
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/1	ユーロ圏製造業PMI	11月	43.8	44.2	44.2
12/6	小売売上高 前年比	10月	-1.1%	-1.2%	-2.9%
12/7	GDP 前年比	3Q	0.1%	0.0%	0.1%
12/14	ECB政策金利	-	4.50%	4.50%	4.50%
12/19	CPI 前年比	11月	2.4%	2.4%	2.4%
12/21	消費者信頼感	12月	-16.3	-15.1	-16.9

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ユーロ/ドル 見通しまとめ 見通しまとめ

ブル	11名	1.1250 ～ 1.0800	ベア	5名	1.1200 ～ 1.0700
----	-----	-----------------------	----	----	-----------------------

※ レンジは中心値

宮地	ブル	1.1200 ～ 1.0800	FRBの金融政策に対する変化は、市場のターニングポイントとなる公算大。基本的にはドルが売られやすい展開を予想。但し、ユーロについては、景況感の弱さが意識される局面もあり上昇余地は限られよう。
河合	ベア	1.1100 ～ 1.0700	ECB総裁からは当面の間の金利据え置き宣言がある中、年初発表された米FOMC議事要旨では、景気抑制的な政策スタンスの「当面」維持が示唆された。欧米金利差に大きな方向感はず、ユーロドルはレンジ推移を予想も、ややベア目線。
川端	ブル	1.1200 ～ 1.0700	域内のインフレは鈍化が顕著であるがインフレへの12月ECBではインフレへの警戒を緩めず利下げの議論についても明確に否定したことから利下げへの織り込み度合は対ドルで劣後。月初のインフレ指標次第ではあるがレンジ内で強含み。
加藤	ベア	1.1250 ～ 1.0800	調整相場を想定する。米欧格差は顕在化してきており米ドル売りの地合いとはなっているものの、12月は若干偏りすぎていて米ドルが対ユーロで売られ過ぎの領域に入ってきており調整が起きやすい。
山崎	ブル	1.1250 ～ 1.0800	ユーロドルは上方向を予想する。10月から上昇基調にあるユーロであるが、引き続きドル長期金利の下落、米政策金利の見通し等を勘案し、上昇継続か。上値めどは1.125程度と考える。
伊藤	ブル	1.1200 ～ 1.8000	域内PMIの悪化など欧州景気の冷え込みを背景に、大きく上昇する余地は小さい。一方で、ドルの強弱に左右される展開が続くとみられ、ドル売り地合いの中で1.12レベルが上値目処と史料。
尾身	ブル	1.1300 ～ 1.0800	ECBの利下げ思惑が後退し、FRBの利下げ思惑が強まっていることからユーロは堅調推移が継続するだろう。但し、ECBとFRBの利下げ思惑に振り回されている感があり、両中銀のコメントに相場が振らされる可能性もあるだろう。
山口	ブル	1.1200 ～ 1.0800	ECBが景気減速を意識しながらもタカ派スタンスを継続しており、断続的な利下げ期待の高まる米国のドルに対しユーロは買われやすい展開が続くと予想。ただし、予想以上に欧州景気の下振れが確認された場合のユーロ売りには警戒したい。
松永	ベア	1.1200 ～ 1.0750	FRBによる利下げへの期待が先走る形で12月はユーロ買いが見られたが、欧州の経済環境を踏まえれば一層のユーロ買いは想定しづらい。ファンダメンタルズの大きな改善がない限り上値は限られよう。
田川	ブル	1.1250 ～ 1.0750	基本横ばいの展開を予想。「利下げなし」との姿勢をECBが強め、現状の利下げ織り込みが剥落するようなケースではユーロ高を想定。
上遠野	ブル	1.1250 ～ 1.0900	欧州経済先行きに不安材料は多いものの、月末予定するFOMCでの早期利下げ示唆期待と、その手前で行われるECB会合でのタカ派スタンス維持による対比感が強調されやすく、短期的には一段の上昇余地をみておきたい。
小林	ベア	1.1250 ～ 1.0700	米金利の低下を背景に、12月のユーロドルは1.11台まで上昇。1月も引き続き米利下げ織り込みの度合いの変化に振られる展開が想定されるも、欧州の景気弱さにより積極的にユーロ買いの展開も想定しづらく、高値圏でのみ合いか。
鈴木	ブル	1.1250 ～ 1.0800	欧州圏内の景気後退懸念は依然として根強く、上値余地は限定的も、米国の早期利下げを織り込んだドル安地合いが継続。ユーロ相場上昇の後押しになると予想する。
大熊	ベア	1.1100 ～ 1.0700	ECBは未だタカ派スタンスではあるものの、一時期強まっていたFRBによる早期利下げ観測の後退がユーロの重しとなっている模様。足許の欧州経済鈍化を受けた利下げ観測の強まりを背景に、上値の重さは継続か。
西	ブル	1.1200 ～ 1.0700	ラガルド総裁が今後数四半期の金利据え置きを宣言していることから、対ドルで堅調に推移しやすいと思われる。ただ、实体经济は軟化していることから、上値は重いか。
伊藤(基)	ブル	1.1300 ～ 1.0800	米国では景気の勢いが鈍化するなか、高い政策金利を維持する必要が徐々に少なくなっている一方で、欧州では根強い物価上昇圧力によって早期の利下げは難しい状況である。素直にユーロはドルに対して上昇しやすい展開になろう。

英ポンド相場

予想レンジ: GBP/USD 1.2500 ~ 1.2900
GBP/JPY 178.50 ~ 185.00

欧州資金部 中島 將行

■ 先月の為替相場

12月の英ポンド相場は対ドルで11月末の1.2627から12月末には1.2726まで+0.8%上昇した。対ドルでの上昇は2か月連続。月初の下げからハト派的なFOMCを受けて一転、大きく持ち直した。

第1週のポンド相場は、対ドルで下落。11月以降の記録的な上昇をやや縮小する展開となった。12月4日の週初からドルに対するポンドの反落は続いていたが、8日に発表された米11月雇用統計では失業率の一段の低下や、賃金上昇率の加速など、米経済の底堅さを示すものであり、市場の米早期利下げ観測が後退した。

第2週のポンド相場は、対ドルで大幅反発。FOMCはパウエルFRB議長が記者会見で「今会合では利下げのタイミングを協議した」と述べるなど、ハト派転換を強く印象づける内容となり、グローバルにドルが下落した。14日のBOEの金融政策決定会合では、政策金利が15年ぶりの高水準である5.25%で据え置かれたほか、前回11月の会合と同様に3人が利上げを主張（6人は据え置きを主張）、インフレ抑制のためには「十分に景気抑制的な金利が十分な期間」必要とのガイダンスが維持された。来年に利下げがあると示唆したFOMCとは対照的な内容であり、ポンドは上げ幅を拡大している。12月15日公表の12月英サービス業PMI（速報）が52.7と11月の50.9から大幅に改善したこともポンドのサポート材料となった。

第3週のポンド相場は、もみあったものの、ほぼ横ばい。20日公表の英11月消費者物価指数（CPI）は、前月比・前年比ともに予想を大幅に下回る結果となり、インフレ圧力の後退が市場で意識される形となったほか、22日公表の英7～9月期GDPの確報値が前期比▲0.1%と速報値の時点では横ばい推移だったところから下方修正となったことで英景気の不況入り懸念が再び台頭した。しかし米金利が下落しドルが弱含んだこともあり結果として、ポンドは堅調推移となっている。

第4週はドル安の流れを受け継ぐ恰好でポンドは2023年8月以来となる対ドル1.28台まで上昇する場面もあったが、年末にかけてはやや下落している。

■ 今月の見通し

英ポンド相場は、向こう半年から1年の流れで見れば、引き続き米国の利下げ転換の可能性が市場で意識される中でドル安・米金利低下の流れに乗る形で続伸すると見ている。もっとも、目先の1月に関して言えば、12月のFOMCのハト派化を受けた米金利低下・ドル安からの巻き戻しに注意が必要だろう。

英国個別の要因では、1月16日に公表される労働市場関連統計や、翌17日公表の英12月CPIに注目したい。12月に公表された11月CPIと7～9月期GDPの下振れは、高インフレから経済停滞にBOEの政策の焦点が移る可能性を予感させるものとなった。他の先進国と同様に、英国でもインフレ抑制の是非の鍵を握るのはサービスインフレについては賃金の高い伸びが抑制されるかにかかっており、上記の統計が弱い結果となれば、BOEの早期利下げ観測が強まることとなるだろう。BOEの次回金融政策発表は2月1日に控える。

もっとも、BOEの早期利下げ観測が市場で高まったとして、それが実現するか（実際にBOEが早期利下げに踏み切るか）については懐疑的である。英国の賃金上昇率は、徐々に鈍化しつつあるとはいえ、他の主要先進国・地域と比較しても高い。BREXITや、サービス業の比率の大きさなど構造要因が背景にあると見ている。BOEとしては、景気の減速リスクを意識しつつも、タカ派スタンスを容易に崩すわけにはいかないだろう。

対円では、ドル/円相場次第の色彩が強いが、底堅い展開を見込む。ドル/円はグローバルなドル安に加え、日銀のマイナス金利解除観測を受け12月に大きく下落したが、12月会合と1月初めの能登地震で早期の金融政策修正は遠のいた感が強い。

■ 今月のつぶやき（現地からの声）

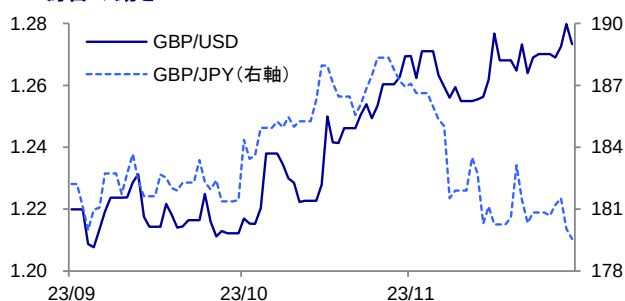
『当地で人気のスポーツ事情』

8歳の息子がサッカー・プレミアリーグに夢中になっており、私もさっそくアーセナルのファンクラブに入会しました。しかし、さすがにプレミア屈指の人気チームだけあって、なかなかチケットが取れません。パロットといって、試合の約2か月前にチケットの抽選申し込みをするのですが、これが本当に当たりません。これまで7試合ほど抽選に申し込みましたが、ことごとく外れました。抽選の倍率も公表されているのですが、レッドメンバー（ファンクラブに加入したて）だと、だいたい10%前後の当選確率のようです。

リセールのチケットもあるのですが、公式のリセールは売り出されたと思ったらすぐに売り切れてしまいますし、非公式のリセールサイト（いわゆるダブ屋です）で買おうとすると、定価の何倍もの値段になってしまいます。そんななかなかチケットが取れないアーセナルの試合ですが、同じフロアにいるフランス人のトレーダーは、なんと、シーズンを通じて試合を観戦することのできるシーズンチケット（いわゆる年間パス）を保有しているようです。シーズンチケットを購入するには、ウェイトングリストに登録する必要がありますが、これが9万人待ちという気の遠くなるような代物です。いったい何年待ちなのか・・・とはいえ、応募しなければ始まらないので、私もシーズンチケットのウェイトングリストに登録しました。道は遠いですが、いつか、アーセナルのシーズンチケットホルダーになれるかもしれないという期待を胸に、業務に励みたいと思います。

■ 為替の動き

（資料）ブルームバーク



■ 株価指数の動き

（資料）ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

（資料）ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/12	週平均賃金（前年比）	8～10月	7.7%	7.2%	8.0%
12/13	鉱工業生産（前年比）	10月	1.1%	0.4%	1.5%
12/13	製造業生産（前年比）	10月	1.90%	0.80%	3.00%
12/14	イングランド銀行政策金利		5.25%	5.25%	5.25%
12/15	製造業PMI	12月	47.5	46.4	47.2
12/15	サービス業PMI	12月	51.0	52.7	50.9
12/20	CPI（前年比）	11月	4.3%	3.9%	4.6%
12/22	小売売上高（前月比）	11月	0.4%	1.3%	0.0%
12/22	GDP（前期比）	Q3	0.0%	-0.1%	0.0%
12/29	ネーションワイド住宅価格指数（前年比）	12月	-1.3%	-1.8%	-2.0%

豪ドル相場

予想レンジ: AUD/USD 0.6500 ~ 0.6950
AUD/JPY 93.70 ~ 98.60

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 川口 志保

■ 先月の為替相場

12月の豪ドルは月初パウエルFRB議長が「引き締め不足と引き締めのリスクは一段とバランスがとれてきている」としたことで来年の利下げ観測が強まり、米国債利回り低下からドル売りを背景に0.6670台まで踏みあげられた。但しその後は13日まで中国の信用格付け見通しが引き下げられた影響の他、RBA声明の内容がハト派的受け止められた事、米11月雇用統計で米労働市場の底堅さが示された事、中国11月CPIが過去3年で最高の落ち込みを記録した事等を材料に下落基調で0.65台を中心に推移した。月後半は0.66台後半から0.68台後半へ上昇する展開となった。13日、FOMCでは政策金利の据え置きを全会一致で決定。金利・経済見通しでは、引き締め政策の終了と来年の利下げを示唆した事から、米金利が大幅に低下。豪ドルは0.6660近辺まで上昇。14日、豪11月雇用統計では労働参加率上昇を背景に失業率は3.9%へ上昇も、正規雇用者が牽引する形で雇用者数が大きく上振れ、雇用環境の底堅さを示す結果となった。豪ドルは一時0.67台に乗せ。15日、中国11月鉱工業生産の伸びが加速し、予想比上振れで人民元が買い進められると、連れ高となり0.6730近辺まで上昇した。19日、RBA議事要旨にてRBAが保有する政府債の満期前売却の可能性について検討した事が判明し、じり高の展開に。その後日銀金融政策会合で金融緩和策の現状維持が決定された事を受け豪ドル/円が急上昇し一時97.60円近辺を付けたが、AUD/USDへの影響は限定的。パーキン・リッチモンド連銀総裁が、インフレに関して最近の進展が続けば、米金融当局が利下げに踏み切る事を示唆し、米国債利回りが小幅低下する中、0.67台後半まで上昇した。20日に中国人民銀行が貸出基準金利の1年物及び5年物の貸出プライムレートを予想通り据え置いた事でも豪ドルは底堅く推移。21日、米7～9月期GDPが前期比4.9%に下方修正され、事前予想を下回る結果となった事で、ドル売りを背景に豪ドルは一段と0.68近辺まで上値を迫る展開となった。クリスマス休暇を控え積極的な取引が手控えられ、米11月個人支出や、PCEコアデフレーター等が予想を下回り、ドル売りから豪ドルは0.68台へ乗せた。クリスマス休暇明けは薄商いの中、米国債入札で強い需要が見られ、米国債利回り低下からドル指数が下落。米S&P500が過去最高値に接近した事も豪ドルを支え0.68台後半まで押し上げられ、0.6818で年末引けとなった。

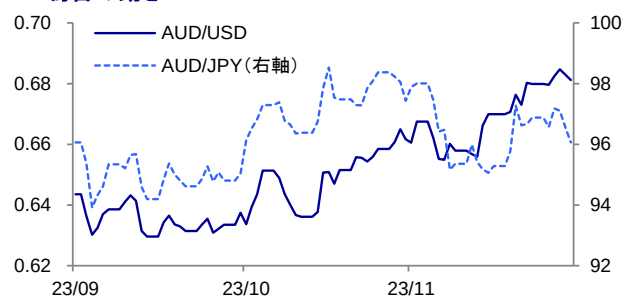
■ 今月の見通し

12月は概ね米金利の動きに支配される形で展開した。13日のFOMCでは米国上げ停止に加え、会見でパウエル議長が利下げ時期に関し「視野に入る」と、利下げ示唆が行われ、年末にかけては米金利の低下に伴い、ドル売り、株高から豪ドルがラリーする形で推移。米豪政策金利織り込みに関していえば、米国では今年5月までに少なくとも1回の利下げが織り込まれていることに昨年からの劇的な変化はないものの、豪政策金利織り込みは今年6月までに約1回(25bp)の利下げが織り込まれており、徐々に利下げタイミングの予測が前倒しされてきている印象がある。織り込み通りに推移するとすれば米豪金利差縮小は限定的なものになる可能性がある。故に現段階で出ている事実に基づいて予測すると1月に関してはレンジで推移する可能性が高いと推測する。

テクニカルから言えば、先月28日に相場の転換点を示唆するTDシーケンシャルのデマーク13が点灯しており、以後年明けは豪ドルが軟調に推移している。その後は短期的トレンド転換の可能性もある為、先ずは4日(木)米12月ADP雇用統計、5日(金)米12月雇用統計、10日(水)豪11月月次CPIインディケーター、11日(木)米12月消費者物価指数、18日(木)豪12月雇用統計に注意を払いたい。米雇用統計に関しては11月に全米自動車労組のストライキ終結という特別要因が影響し、雇用が押し上げられた結果、失業率が低下したが、前年同月比でみた平均時給は低下基調が続いている為、労働市場が緩やかに減速している事が確認できる。米12月雇用統計もこの流れが続くとみられ、米金利低下の流れがサポートされるとみる。また豪CPIについては10月分がガソリン価格の値下がりから大きく低下したが、単月CPIでは各四半期の最初のもでカバーされる商品の比重が大きいことから、サービス価格動向が然程反映されておらず、実際均して四半期CPIで見ると月次CPIでの認識と乖離がある可能性がある。故に31日(水)に発表される10月～12月期CPIにも注目したい。サービス価格が予想程下落していないようであれば、豪利下げ時期の予想が年後半へ後ずれし、豪ドル下値をサポートするとみる。

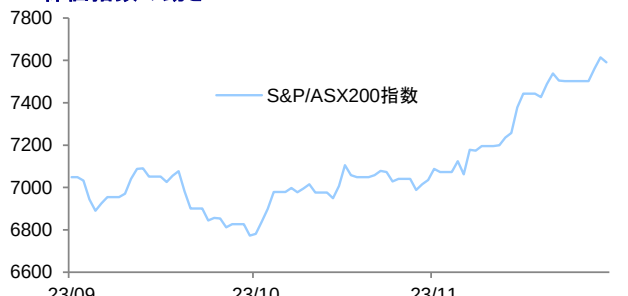
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/5	RBAキャッシュレイト	12月	4.35%	4.35%	4.35%
12/6	GDP (前年比)	3Q	1.90%	2.10%	2.00%
12/6	GDP (季調済/前期比)	3Q	0.5%	0.20%	0.4%
12/7	貿易収支	10月	A\$7500m	A\$7129m	A\$6184m
12/14	雇用者数変化	11月	11.5k	61.5k	42.7k
12/14	失業率	11月	3.8%	3.9%	3.8%
12/14	参加率	11月	66.9%	67.2%	67.0%
12/14	正規雇用者数変化	11月	-	57.0k	10.7k
12/14	非常勤雇用者数変化	11月	-	4.5k	32.0k
12/19	RBA会合議事録要旨	12月	-	-	-

カナダドル相場

予想レンジ:

USD/CAD 1.3000 ~ 1.3700
CAD/JPY 103.00 ~ 109.00

米州資金部カナダ室 ミタリ・チャクラデオ
岩田 保子

■ 先月の為替相場

11月末にはほぼ1.36台で推移していたUSD/CADは12月には、米国での来年の利下げ確率が上昇してUSD売り優勢となり、月末には一時1.32を下回るレベルまでUSD安・CAD高が進んだ。初旬は、カナダの11月雇用統計が発表され、失業率は0.1Pt悪化したものの、雇用者数が増えたことからUSD/CADは若干下落した。しかし、11/30のOPEC+会合では、2024年に世界経済が減速すると予想される中、供給過剰に対する懸念に対処できずWTI先物価格がさらに下落したこと、USDが買い戻された。12/6のカナダ中銀会合では、声明文で「カナダ経済はもはや需要過剰ではない」と明示され、政策金利は予測通り5%で据え置かれた。

中旬には、米国の11月CPIが発表され、インフレ率2%に向けた道のりがまだ長い可能性であることを改めて示す結果となった。翌日12/13のFOMC会合では、政策金利が予測通り5.50%（上限）で据え置かれ、追加利上げの議論ではなく、「いつ金融引き締めを縮小するかを話し合った」とパウエルFRB議長が明かしたことからUSD売り優勢となった。そして、カナダの11月CPIは10月分と同じ結果となり、予想を上回ったことから、USD/CADは1.33台前半まで下落した。

下旬には、カナダの10月小売売上高が発表され、総合、コアともに前月比上昇した。また同日発表された米国の第3四半期GDP、価格指数などは前期比伸びが鈍化し、USD/CADはUSD売りが継続し、1.33を下回った。12/22に発表されたカナダの10月GDPは前月比・前年比で予想を下回ったが、米11月PCEコアデフレーターが前年比、前月比で低下、予想も下回ったことから、USD売りCAD買いの傾向が継続した。12/27にはWTI先物価格の上昇により、USD/CADは一時5カ月ぶりの安値となる1.3177まで下落したが、月末はテクニカルに見てCADが売られ過ぎの領域にあったことや米長期金利が上昇したことからUSDが買い戻され、1.32台半ばまで値を戻した。

■ 今月の見通し

12月の中央銀行会合では、カナダ中銀、FRBともに政策金利を市場の予想通り据え置いた。カナダ中銀は、決定の背景として、金融政策が明らかに支出を抑制、景気減速をもたらし、それによってより広い範囲で価格上昇圧力が低下していることを挙げた。なお、市場ではカナダ中銀・FRBによる追加利上げの織り込みは完全に消滅し、早ければ来年3月（米国）及び4月（カナダ）からの利下げが予想されている（12/29現在）。

今月の相場見通しにおいては、引き続き米経済の動向が注目され、特に利下げに向けて、インフレ鈍化継続+成長減速という条件が整っていくかどうか焦点になる。

一方カナダでは、カナダ中銀のマックレム総裁が年末スピーチにおいて、「利下げを検討するにはまだ時期尚早」と発言したが、カナダ経済は全体的に米経済に先行してすでに減速している。そのため、1月に発表される米経済指標が軟調であったとしても、停滞しているカナダ経済によってCAD高には一定のブレーキがかかると思われる。

USD/CADの上値としては1.3700、下値は2023年の最安値1.3093を下抜けするかどうか注目したい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で人気のスポーツ事情』

カナダで最も人気のあるスポーツはアイスホッケー、野球、バスケットボールです。トロントのホームチームは、トロント・メープルリーフス（アイスホッケー）、トロント・ブルージェイズ（野球）、トロント・ラプターズ（バスケットボール）となります。

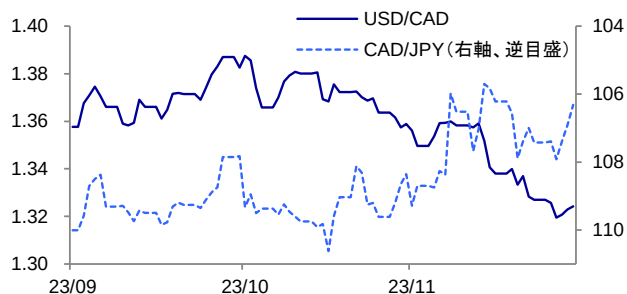
「スコシアバンク・アリーナ」と「ロジャース・センター」のスタジアムでは、メープルリーフスやブルージェイズの試合が行われるたびに熱狂的な観客の歓声が響き渡ります。しかし今月、ブルージェイズが大谷翔平との契約に失敗したこと、当チームのファンは悲嘆に暮れました。

トロント・ラプターズは2019年にNBAチャンピオンシップを獲得し、それ以来さらに人気が高まりました。チームの成功により、世界のバスケットボールにおけるトロントの地位が上がっています。

伝統的なスポーツとは別に、トロントのスポーツ文化ではサッカーも人気があります。メジャー・リーグ・サッカー（MLS）チームのトロントFCは、「BMOフィールド」のスタジアムでホームゲームを開催します。これは2026 FIFAワールドカップが開催されるスタジアムです。

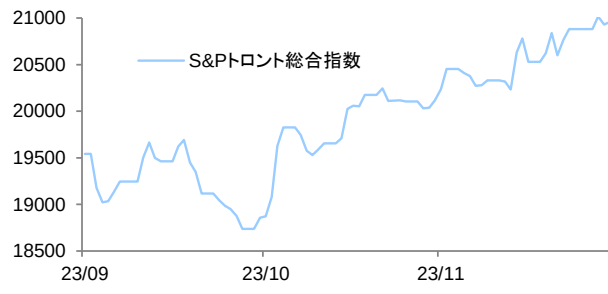
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/1	雇用ネット変化率	11月	14.0K	24.9K	17.5K
12/1	失業率	11月	5.8%	5.8%	5.7%
12/1	S&Pグローバル・カナダ製造業PMI	11月	-	47.7	48.6
12/6	カナダ銀行翌日物貸出金利	12/6	5.00%	5.00%	5.00%
12/14	製造業売上高(前月比)	10月	-2.7%	-2.8%	0.4%
12/19	CPI(前年比)	11月	-0.1%	0.1%	0.1%
12/19	鉱工業製品価格(前月比)	11月	-0.6%	-0.4%	-0.9%
12/21	小売売上高(前月比)	10月	0.8%	0.7%	0.5%
12/22	GDP(前月比)	10月	0.2%	0.0%	0.0%
12/22	GDP(前年比)	10月	1.0%	0.9%	0.6%

韓国ウォン相場

予想レンジ:

USD/KRW	1260	～	1330
KRW/JPY	10.64	～	11.24
JPY/KRW	8.90	～	9.40

(注) 100韓国ウォンあたりの対円レート

東アジア資金部ソウル資金室 山内 脩平

■ 先月の為替相場

12月のドル/ウォン相場は前半上昇した後、FOMCを通過後下落、米金融政策に対する思惑が主に相場を主導した。月初のドル/ウォンは1,300.0ウォンでオープン。FRB高官のタカ派な発言などにより米金利が上昇推移したことで底堅い推移。翌週もドル/ウォンは堅調推移。月初の実需によるドル買いフローが下支えした他、米雇用関連指標が弱含んだことで、世界経済の先行き懸念が強まりリスク回避ムードからドルが買われた。7日に一時1,327.2ウォンの月高値をつけた。一方、植田日銀総裁が年末にかけての金融政策について「チャレンジングになる」と発言したことで、翌8日にかけて海外時間に円買いが進行。ウォンも買われ1,306ウォン付近まで下落した。

翌週は米CPIやFOMCを控えた警戒感から底堅い推移が続いた。ドル/ウォンは主に1,310ウォン台で推移。米CPIは概ね予想通りだったことから、市場への影響は限定的だった。13日のFOMCは予想に反してハト派な内容になったことで、米金利は低下。翌日のドル/ウォンは急落し、一時1,290ウォンちょうどまで下落した。

翌週18日以降ドル/ウォンは1,300ウォンを挟みレンジ推移となった。19日の日銀会合後、円安が進むと、ドル/ウォンもつられ1,309ウォンまで上昇するも上値は限定的。年内のイベントを通過したことで、実需中心の方向感に乏しい値動きが続いた。クリスマス明け、年内最終週も1,300ウォンを挟みレンジ推移が続いたものの、米金利低下を受けて28日のドル/ウォンは下落。月末に絡んだ輸出勢のドル売りもウォン買いをサポートし、一時1,286.3ウォンの月安値をつけた。結局、ドル/ウォンは前月末比▲2.1ウォンの1,288.0ウォンでクローズした。

■ 今月の見通し

1月のドル/ウォンは上値重い推移を予想。

12月のドル/ウォン相場はFOMC経過後、米利下げ期待の高まりから上値重い推移に。米金利に低下圧力がかかる中、1月についても米早期利下げと米経済のソフトランディングを前提とした取引が継続し、ドル/ウォンは軟調合いでの推移が継続すると想定する。

韓国では11月貿易収支は6か月連続で黒字に。輸出額は558億ドルと前年同月比7.8%増加。輸出額は2か月連続プラスとなり、月間ベースで今年最大を更新した。最大の輸出品目である半導体の輸出額は22年8月以来初めてプラスに転じ、主要15品目中12品目で前年同月を上回るなど、輸出の回復が鮮明になってきている。韓国株式も年末にかけて堅調推移が続いており、KOSPIは約3か月ぶりに2,600台を回復した。株高と海外投資家からの資金流入はウォン買いをサポートするだろう。

海外動向については先述のとおり、米早期利下げ期待と米金利の低下が主な要因となり、1月も米韓金利差が縮小する展開を想定。ドル買いが進む要因も乏しく、1月のドル/ウォンは上値重く推移しよ。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

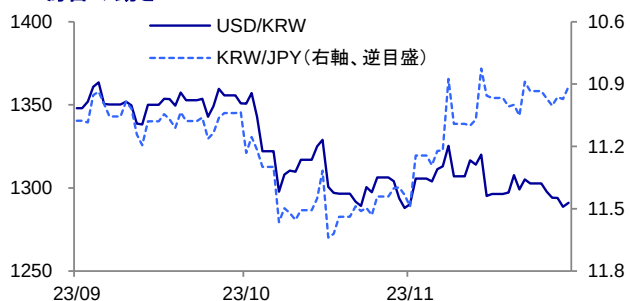
『当地で人気のスポーツ事情』

韓国でメジャーなスポーツといえばやはりサッカーと野球でしょうか。サッカーは、日本同様海外サッカーの人气が上昇しています。中でも、英プレミアリーグで活躍するソンフンミン選手は大人気です。韓国の街を歩けば、コンビニやコーヒーショップ至るところで彼を見かけます。もちろん、ゴールセレブレーションで見せるお馴染みのカメラポーズをした広告を見かけることもできます。私が受講している韓国語授業の先生は女性なのですが、よく夜中の3時頃に起きて、ソンフンミン選手の試合を見ているそうです。ただ、彼の所属するトッテナムの成績についてはあまり関心が無いようで、シーズン当初は首位争いをしていたものの、最近あまり成績が伸びないチームについて尋ねても、彼が活躍すれば問題無い。との回答が返ってきました。サッカーでは他にもイガンイン選手・キムミンジェ選手・ファンウィジョン選手など海外トップリーグで活躍する選手がいます。1月にカタールで開催されるアジアカップで勝ち進めば、日韓戦が見られるかもしれません。両国が順当に勝利することを願っています。

また、野球に関しては、来春ドジャースとパドレスのMLB開幕戦がソウルで開催されます。韓国はキムハソン選手の凱旋試合となりますが、日本人としては、大谷選手・山本選手・ダルビッシュ選手・松井選手といったWBC組が集結することもあり、注目度が増しています。試合の開催地は高尺スカイドームとなりますが、座席数は約1万6千程度とかなり限定的。チケット代は高騰し入手困難との報道もあり、現地観戦については諦めムードが漂っています。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/1	貿易収支	11月	1000M	3800M	1636M
12/1	輸出(前年比)	11月	5.0%	7.8%	5.1%
12/1	輸入(前年比)	11月	-8.6%	-11.6%	-9.7%
12/5	CPI(前月比)	11月	-0.3%	-0.6%	0.3%
12/5	GDP確報値(前期比)	3Q	0.6%	0.6%	0.6%
12/13	失業率	11月	2.6%	2.8%	2.5%
12/21	PPI(前年比)	11月	-	0.6%	0.8%
12/27	消費者信頼感	12月	-	99.5	97.2
12/28	鉱工業生産(前月比)	11月	3.2%	5.3%	1.1%

台湾ドル相場

予想レンジ: USD/TWD 30.10 ~ 31.10
TWD/JPY 4.50 ~ 4.65

東アジア資金部台北室 久本 和樹

■ 先月の為替相場

12月のドル/台湾ドルは下落した。

月初の12月1日は31.320でオープン。米ハイテク株の下落が続く中、台湾株も上値重く推移する展開となり、外国人投資家による台湾株売りが見られたことで台湾ドル売りが優勢に。また、7日に発表された台湾11月CPIの結果が前回対比弱い結果となっていたことを受けて、台湾ドル売りが進み、一時31.561まで上昇した。

月央になると、13日のFOMCにおいて、来年以降の政策金利見通しが前回対比引き下げられていた他、記者会見ではパウエル議長より「利下げのタイミングについて協議を開始した」との発言が聞かれたことを受けて、米金利が急速に低下。グローバルにドル売りが優勢な展開となり、31.30を割れ込み下落した。さらに、米金利の低下を好感し台湾株が底堅く推移する中、台湾ドル買い圧力が強まったことで31.20近辺まで下落が進む展開となった。

月後半に入ると、21日に発表された米第三四半期GDP確報値が速報値を下回る結果となった他、米国地区連銀総裁のハーカーより「利下げに前向きだ」との発言が聞かれたことを受けて、米金利の低下が加速。ドル売り圧力が強まる展開となり、31.20を割れ込み下落した。その後、台湾加権指数が年初来高値を更新する中、外国人投資家による台湾株買いが増加した他、四半期末を控え輸出業者からのドル売りが見られたことにより、一時30.641まで下落した。その後も上値重く推移し、月末にかけて30.70を挟み揉み合いの推移となった。

■ 今月の見通し

1月のドル/台湾ドルは下落を見込む。

12月は来年以降の米国における利下げへの期待感が高まる中、米金利の急低下を受けてグローバルにドル売りが進んでいたことから、ドル/台湾ドルも急速に下落した。また、米ハイテク株が上昇する中、台湾株も連れ高となり年初来高値を更新すると、外国人投資家からの資金流入が加速した他、輸出企業による四半期末のドル売りも重なり、値幅を伴い下落した。

1月のドル/台湾ドルについては、一段下落する展開を見込む。米国においては遠からず利下げに踏み切ることが想定される中、米金利には低下圧力がかなりやすく、米台金利差の縮小が見通され、ドル売り圧力は強まりやすいであろう。また、台湾においては2024年第一四半期は輸出が堅調な伸びとなることが予想されており、輸出企業による実需のドル売り圧力が強まりやすい他、米金利低下を好感して台湾株の上昇が進む場合、外国人投資家による投資資金流入が期待され、台湾ドル買い圧力は高まりを見せるであろう。尚、1月には注目の台湾総統選が控えているが、イベントを通過した後は不確実性の剥落から、リスクセンチメントが一段改善することが見込まれる。総じて、ドル/台湾ドルについては下落が進みやすいであろう。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で人気のスポーツ事情』

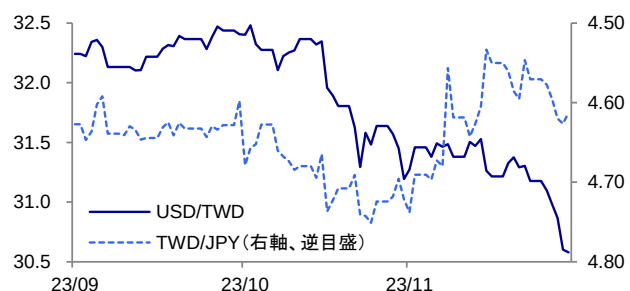
台湾で今人気のスポーツはズバリ野球です。台湾には「CPBL」というプロ野球リーグがあり、現在6チームが所属しています。近年楽天が参入したこともあり、日本人にも馴染み深いものになっているのではないのでしょうか。CPBLでは日本のリーグを参考にした方式が採用されていますが、年間120試合が行われており、大盛況になっています。また、当地ではチアが非常に人気を集めており、それを見るためだけに会場に足を運ぶ人もたくさんいる程です。

台湾で人気な二つ目のスポーツはバスケットボールです。台湾では2020年に発足したばかりのプロバスケットリーグ「P.LEAGUE+」があり、2021年には6チーム体制のプロリーグになるなど、注目を集めています。また、台湾の公園に行くとバスケットをしている若者をよく見かける他、日本の人気アニメである「スラムダンク」が台湾でも大人気であることから、台湾におけるバスケットの人気の高さがお判りいただけると思います。

是非台湾で野球、バスケットボール観戦をしてみたいかがでしょうか。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/5	外貨準備高	11月	-	567.52B	561.08B
12/6	CPI (前年比)	11月	2.80%	2.90%	3.05%
12/8	輸出 (前年比)	11月	4.60%	3.80%	-4.50%
12/8	輸入 (前年比)	11月	-2.85%	-14.80%	-12.30%
12/8	貿易収支	11月	5.81B	9.80B	5.77B
12/14	公定歩合	4Q	1.875%	1.875%	1.875%
12/20	輸出受注 (前年比)	11月	4.30%	1.00%	-4.60%
12/22	失業率	11月	-	3.370%	3.410%
12/25	鉱工業生産 (前年比)	11月	-	-2.48%	-2.32%

香港ドル相場

予想レンジ: USD/HKD 7.7800 ~ 7.8200
HKD/JPY 17.50 ~ 18.60

東アジア資金部 Ken Cheung

■ 先月の為替相場

【12月の香港ドル直物相場】

米国連邦準備理事会 (FRB) が利下げ開始への姿勢を強める中、香港ドル直物相場は7.80を割れる水準まで上昇する場面があった。米国のFF金利先物市場は急激に利下げ織り込みを拡大しており、現在は2024年3月にFRBによる1回目の利下げが行われる確率を7割近く織り込んでいる。しかし、為替市場における年末の香港ドル需給逼迫は昨年に比べ穏やかだったことから、上値を狙う動きは限られ、香港ドル直物相場は小幅に戻した後7.81台の水準越年することとなった。株式市場に目を向けると、その他の株式市場と比べて中国・香港株式市場の軟調さが目立っていたことや、引き続きIPO活動が盛り上がり欠けていることから香港市場への資金流入も限定的となった。米国の利下げに連動して金利は低下方向が想定されているものの、香港の不動産市況は弱く、中原城市領先指数 (CCL指数) は6年半ぶりの低水準となっている。10月には不動産取得の取引にかかる印紙税率の減免もあったものの、不動産取引量は低水準のまま。

【12月の香港ドル金利市場】

年末を見据えた季節性要因で上昇傾向が続いていた香港ドルHIBORは、FRBが利下げの方向性を示した事や、年末資金需要の剥落を受け、徐々にピークアウトした。市場が早ければ2024年3月にFRBが利下げを開始すると予想し始める中、3か月物の香港ドルHIBORは5.15%近辺と、1か月物に先んじて大きく低下した。しかし、為替市場で香港ドル直物相場が7.80近辺を推移する中、HKMAのアグリゲートバランスは450億香港ドル近辺と歴史的な低水準から変わっていない。年末の資金調達圧力上昇を受けて香港の銀行による割引窓口貸出制度 (ディスカウント・ウィンドウ) の利用は増加していたものの、オーバーナイトの香港ドルHIBORは5%を下回る推移が続く等、昨年に比べ流動性の逼迫は比較的穏やかであった。中長期の金利に目を向けると、香港ドルスワップ金利はFRBが利下げ姿勢を強めたことで米金利に追随して低下した。香港ドルHIBOR3か月物対比で中長期の香港ドルスワップ金利が低下し、カーブが急激にフラットニングしたことを受け、香港ドルの長短金利差 (3か月物HIBOR - 3年物スワップ金利) はプラス170bpを超えた。

■ 今月の見通し

【1月の香港ドル直物相場】

1月の香港ドル直物相場は、取引バンドの中心である7.80を中心に推移すると予測している。我々は、FRBが利下げサイクルに突入してすぐに香港ドル直物相場が取引バンドの下限である7.75に向けて動くとは想定していない。2019年の利下げ局面に目を向けると、恒常的に7.80を割って香港ドル高方向で推移し始めたのはFRBが3回の利下げを実施して以降であり、下限である7.75台に達したのは2020年3月にFRBが緊急利下げを実施した後であった。2019年は香港域内の社会不安が香港ドル安要因となっていた事情はあるものの、それらを加味しても、今回想定される利下げ局面において急激に香港ドル高方向に動くとは考えにくい。現在FRBは自身の公式見通しで2024年中の利下げ可能性を示唆しているが、保険的な利下げから段階的に実施されていけば、香港ドル高方向に進むペースは一層緩やかなものになるものと想定している。また、外国人投資家が香港及び中国への投資に対して慎重な姿勢を崩していない為、香港域内への資金流入からくる香港ドル高圧力も限定的となるだろう。

【1月の香港ドル金利市場】

米ドルベッグ制の下、1月の香港ドル金利は、FRBの利下げ観測に伴って米ドル金利が低下する動きに追随する形で低下する見通し。2024年3月にFRBによる初回利下げが織り込まれている中、引き続き1か月物より3か月物の香港ドルHIBORが先行して低下していくことが予想される。一方で、先に述べたように香港ドル直物相場が急激に7.80を割って香港ドル高方向に進むことはあまり想定されていない為、アグリゲートバランスは現在の水準から大きくは変化しないと考えられる。軟調な香港経済や不動産市場の低迷を考慮すると、域内資金需要の低下も香港ドル金利の低下圧力になるだろう。

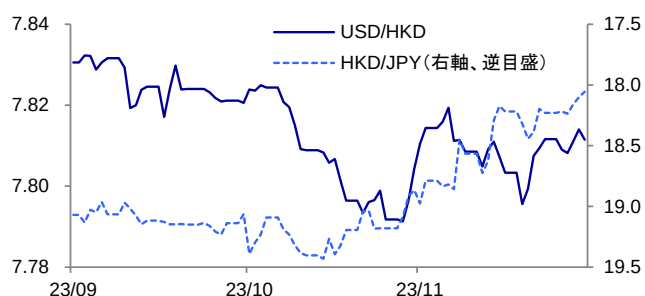
■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地で人気のスポーツ事情』

香港では、サッカーやバスケットボールといった世界的にメジャーなスポーツはもちろん人気がありますが、それに加えてハイキングも人気の高いスポーツです。香港は丘陵地帯でハイキングに適していることもあり、ハイキングコースはよく整備されています。例えばMaclehoseは新界エリアをほぼ全てカバーする100kmのトレイルで、香港島にあるWilson Trailも78kmにも及ぶ長いトレイルです。ハイキングの他にも、香港は夏場が暑いこともあってマリンスポーツも盛んです。ウェイクボードやサーフィン、カヌーなどが特に人気のアクティビティです。また、それ以外にも、オリンピックがきっかけとなって人気になったスポーツもあります。例えば2020年東京オリンピックで男子フルーレの金メダルを取ったCheung Ka Long選手が火付け役となり、香港ではフェンシングの人気も高まっています。

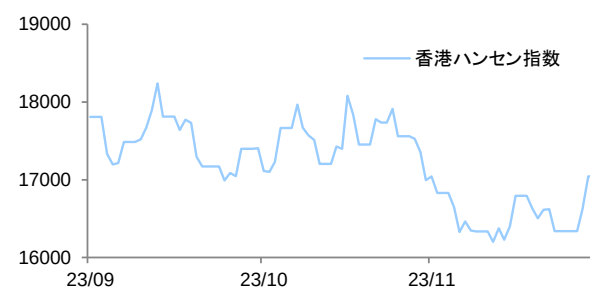
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/30	小売売上高(価額,前年比)	10月	9.9%	5.6%	13.0%
12/5	S&P Global Hong Kong PMI	11月	-	50.1	48.9
12/7	外貨準備高	11月	-	\$424.6b	\$416.0b
12/14	PPI(前年比)	3Q	-	3.0%	-0.2%
12/14	鉱工業生産(前年比)	3Q	-	4.4%	2.7%
12/19	失業率(季調済)	11月	2.9%	2.9%	2.9%
12/21	CPIコンボジット(前年比)	11月	2.7%	2.6%	2.7%
12/28	輸出(前年比)	11月	9.7%	7.4%	1.4%
12/28	輸入(前年比)	11月	8.5%	7.1%	2.6%
12/28	貿易収支(HKD)	11月	-29.6b	-27.9b	-25.8b

中国人民元相場

予想レンジ: USD/CNY 6.9000 ~ 7.2000
CNY/JPY 19.03 ~ 21.16
100JPY/CNY 4.3700 ~ 5.2600

みずほ銀行(中国)有限公司 中国為替資金部 竹本 寛

■ 先月の為替相場

12月のドル人民元(USDCNY)は小幅に下落した。

USDCNYは1日に7.1340でオープン。4日は前週末からのドル安の巻き戻しでドル高の流れとなり7.14台まで上昇。5日、米大手格付け会社による中国格付け見直し引き下げを受けオフショア市場主導で元安が進行すると、オンショア市場も6日には7.16台まで水準を上げる。7日には7.16台前半で上値が抑えられる格好で元買いが進行し、午後に入ると日銀による金融緩和修正期待を受けて円が大幅に買われる動きにドル安方向に水準を下げ一時7.14台まで下落した。

その後、FOMCを控えて様子見推移が継続したが、13日のFOMCでハト派姿勢の強まりが確認されると米金利低下、ドル安で反応。翌14日のオンショアオープンには7.13台前半で寄り付いた後、一時7.10近辺まで下落した。

19日にかけて7.14台後半まで上昇したものの、同日の海外時間には、Fed高官のハト派な発言を受けて米金利が低下、ドル売りが優勢となると7.11台まで急落。その後、大手行による預金金利引き下げ報道等に7.15付近まで底堅い推移を見せたが、年末にかけてはドル金利の低下や実需の元買い等をうけて再度7.11台へ下落した。

■ 今月の見通し

USDCNYは上値の重い推移を予想する。

12月の中央経済工作会議では、基本方針のひとつである「穏中求進」(安定の中で前進を求める)を基盤に「穏健な金融政策」継続スタンスが示された。為替レートについても「合理的水準での安定」を掲げる中、PBOCが景気下支えの手段として利下げに大きく頼る展開は想定しづらい。PBOC基準値から大幅に人民元安方向に乖離する状況は解消されたものの、足元でも市場予想値よりも元高サイドに基準値が設定される傾向にあり、当局の元安圧力に対する警戒感が残存している様子が見受けられる。MLF(中期貸出制度)やPSL(担保付き補完貸出)等を通じた流動性供給により、人民元に対するインパクトを抑えつつ財政・金融政策を遂行していくことが予想される。米国の利上げ局面がピークアウトを迎え、中米金利差の縮小が想定される中、USD/CNYのフォワードポイントも底打ちを示し始めている。

中国のファンダメンタルズに目を移せば、内外需の回復懸念や不動産セクターに対するリスク等は2024年に入っても早期に解消する可能性は見込まれていない。証券投資にみる流出フローは次第に収まりを見せているものの、景気の先行きに対する不透明感が人民元安圧力として残存する可能性は相応にある。他方、一方的な元安の動きに対しては上記の通りカウンターシニカルな調整による安定化が図られる公算も大きく、過度な人民元安進行はメインシナリオではないと予想。

米国の急速な利上げ局面が終焉を迎え、利下げ時期の議論がメインテーマとなる中、2023年に進行したドル高人民元安を修正する動きが継続すると考える。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で人気のスポーツ事情』

中国で人気のスポーツといえば卓球が一番初めに思い浮かびます。しかし、私自身が卓球をしないため、それほど当地事情に詳しくありません。中国に来てから中国人の友人とバドミントンを良くやっていたので、本欄ではその体験を書かせていただければと思います。

バドミントンも中国ではとても盛んで、世界大会等にはいつも上位を獲得していますね。一般の人々の競技人口も多く、公園等で老若男女遊んでいる姿をよく見かけます。私は学生の時の体育の授業くらいしかバドミントンをしたことはなかったのですが、バドミントン好きの友人に連れられ、一時コートを借りてプレーをしに行っていました。

中国では倉庫や工場を改装したバドミントンコートがあらちこちにあり、朝から晩まで多くの人でにぎわっています。コートの数も限られてるので、自然とそこにいる人たちとダブルスで勝負しよう、という展開になります。

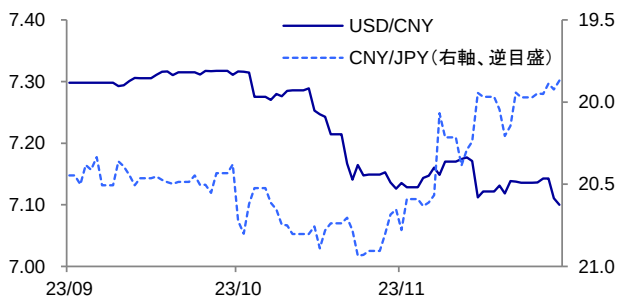
私は経験は少ないながらも、普段からバレーボールをやっているので、根拠はないですがネットを挟んだスポーツには自信があります。対戦相手に選んだのは50〜60代くらいの夫婦コンビ。この人たちなら簡単に勝てそうだと。

結果はボロ負け…。彼らのたくみなラケット捌きと裏を突くショットで、我々はバタバタと走り回ってばかりでした。夫婦コンビは汗一つかいていません。

なるほど、中国のバドミントンが強いわけですね。。。

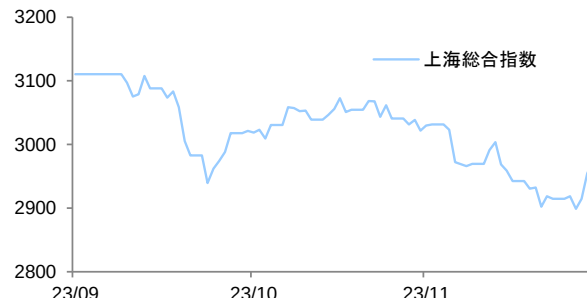
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/1	財新製造業PMI	11月	49.6	50.7	49.5
12/5	財新非製造業PMI	11月	50.5	51.5	50.4
12/7	貿易収支	11月	\$54.90b	\$68.39b	\$56.00b
12/9	CPI(前年比)	11月	-0.2%	-0.5%	-0.2%
12/6	PPI(前年比)	11月	-2.8%	-3.0%	-2.6%
12/15	工業生産(前年比)	11月	5.7%	6.6%	4.6%
12/15	小売売上高(前年比)	11月	12.5%	10.1%	7.6%
12/15	都市部固定資産投資(年初来/前年比)	11月	3.0%	2.9%	2.9%
12/20	LPR1年物	-	3.45%	3.45%	3.45%
12/20	LPR5年物	-	4.20%	4.20%	4.20%

シンガポールドル相場

予想レンジ: USD/SGD 1.3000 ~ 1.3500
SGD/JPY 104.00 ~ 110.00

アジア・オセアニア資金部 森谷 友一

■ 先月の為替相場

先月のUSD/SGD相場は下落する展開となった。

月初1日に1.33台後半で取引を開始。米11月ISM製造業景気指数が市場予想を下振れ1.33台前半まで下落。

4日から5日にかけては米金利が反発するとドル買いの流れが強まり1.34台まで上昇。7日は日銀に対する政策修正期待からドル円が急落し全般的にドル売りの流れとなる中1.33台後半まで下落したが、8日は米11月雇用統計の良好な結果を受けて1.34台を回復した。

11日は前週の流れを引継ぎ底堅い推移となるも、12日は米11月CPIが市場予想通り鈍化したことからドル売りが進み一時1.33台まで水準を下げる局面が見られた。13日、FOMCの内容がハト派と受け止められると1.33台前半まで急落。14日もFOMC後の流れを引継ぎドル売りが継続する中、一時1.32台後半まで下落したが15日はFRB高官より利下げ期待をけん制する発言が見られると1.33台を回復した。

19日、全般的なドル売りの流れを受け1.32台後半まで下落。20日から21日にかけては1.33ちょうどを挟んでもみ合いが続いたが、22日は冴えない米経済指標の結果を受け1.32台前半まで水準を下げた。

25日はクリスマスで流動性が低下する中一時1.33台をつけるもすぐに1.32台まで反落。28日には米経済指標が市場予想を下回り米金利が低下基調で推移すると1.31台後半まで下落。29日は小幅に反発し1.32台前半にてクローズした。

■ 今月の見通し

今月のUSD/SGD相場は上値の重い推移を予想する。

注目された12月FOMCにおいては会合後の会見でパウエルFRB議長が利下げの時期について「視野に入っている」と発言をしたことに加え、FRBメンバーによる政策金利見通し(ドットチャート)において2024年中の利下げが3回示唆される結果となった。ハト派なFOMCの結果を受けマーケットにおいては2024年中に6回の利下げが織り込まれており、利上げ停止は既定路線となり近い将来の利下げ期待が大きく高まっている状況。ドットチャートと比較して市場における利下げ織り込みが過大となっている印象はあるものの、次にFRBから取られるであろうアクションは利上げではなく利下げである可能性が極めて高いと考えられる状況下、米金利は低下基調で推移することが想定され為替相場においてはドル売り圧力が高まりやすそうだ。

シンガポール国内においては今月MAS会合が開催される予定。前回10月会合においては現状維持が決定され金融引き締め方針が継続している。11月CPIは総合指数が前年同月比+3.6%となり10月の+4.7%から大幅に鈍化し約2年ぶりの低水準まで低下している。コアCPIについても前年同月比+3.2%となっており、MASの金融政策の効果が数字としても出てきている状況と言えそうだが、依然としてインフレ水準自体は高水準ではあることには変わりはなく今回の会合においても現状維持となる可能性は高そう。MASは前回会合時に金融政策の見直しを従来の半期に1度から四半期に1度の頻度に変更することを発表しており、今後のインフレ動向や経済情勢次第では機動的に金融政策を変更することは想定されるものの、今回については緩和方向に変更する可能性は高くはないと考えている。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

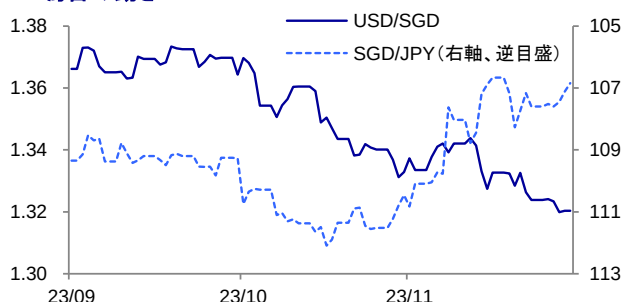
『当地で人気のスポーツ事情』

シンガポールで近年人気が上がっているスポーツの一つが水泳。年中暑い国だからか多くの場所にプールがあるということもありますが、2016年のリオデジャネイロ五輪においてスクーリング選手が男子100メートルバタフライでシンガポール選手として全種目を通じ初の金メダルを獲得したということが背景にあるようです。日本同様に、シンガポールにおいても水泳は子供の習い事としても人気があるようです。2025年には水泳の世界選手権がシンガポールで行われる予定となっているのでこの大会をきっかけにさらに水泳人気に拍車がかかるかもしれません。

また、サッカーもシンガポールにおける人気なスポーツの一つ。シンガポールプレミアリーグというプロサッカーリーグがあり、参加チームは9チームあるのですがそのうちの1チームがアルビレックス新潟シンガポールという日系のチーム。シンガポールプレミアリーグは外国のクラブをチームごとに参加させており、アルビレックス新潟シンガポールは2004年より参戦。2016年にリーグ初優勝するとその後8年間で6度のリーグ優勝を達成しておりリーグ内での強豪チームとなっており当地でも人気を集めております。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/5	小売売上高(前年比)	10月	0.2%	-0.1%	0.8%
12/18	非石油輸出(前年比)	11月	1.5%	1.0%	-3.5%
12/26	CPI(前年比)	11月	3.9%	3.6%	4.7%
12/26	鉱工業生産(前年比)	11月	2.2%	1.0%	7.6%

タイバーツ相場

予想レンジ: USD/THB 33.70 ~ 35.10
THB/JPY 4.05 ~ 4.20

アジア・オセアニア資金部 バンコック室 末廣 絢太

■ 先月の為替相場

12月のドルバーツは下落。月初、35バーツ台前半で取引を開始すると、冴えない米国経済指標を受け34バーツ台後半へ下落。その後、直ぐに買い戻され35バーツ台前半まで戻すも、同水準では11月米雇用統計の発表を控える中、上値重く推移。8日、注目された雇用統計では非農業部門雇用者数の増加、失業率の改善、平均賃金の上昇(前月比)が確認され、米国の早期利下げ観測が後退する中でドルバーツは一時35バーツ台後半まで上昇した。

中旬、12日に発表された米11月CPIは市場予想通りの結果となり、波乱なく通過したものの、翌13日(BKK14日早朝)に結果が公表されたFOMCでは声明文にてインフレ率がこの1年で緩和したことや政策金利がピークとなっている可能性が示唆されたことに加え、パウエルFRB議長の記者会見においても利下げについて議論が開始されたことが言及され、ハト派的と捉えられ、ドル売り優勢の展開となり、ドルバーツは34バーツ台後半まで下落。その後、Fed高官から米国の早期利下げ観測を織り込む市場の動きを牽制する発言が確認された場面等、ドルバーツが上昇する場面が何度か見られるも、節目である35バーツちょうど付近では上値の重さが意識される展開が継続し、同水準から34バーツ台後半付近にかけての推移が続いた。

下旬、21日に発表された米第3QGDP、個人消費、及びコアPCE価格指数が市場予想を下振れたことを受け、米早期利下げ観測が再び強まる格好となり、ドルバーツは下落基調に。22日に34バーツ台半ばまで下落すると、欧米主要国のクリスマス休暇を挟み、月末にかけては34バーツ台前半まで下落幅を拡大させ、そのまま34バーツ台前半の水準で年末の取引を終えた。

■ 今月の見通し

1月のドルバーツは下落一服も、安値圏での推移が継続する展開を予想。昨年(2023年)、10月初旬に年間高値である37バーツ台前半をつけて以降、ドルバーツは下落基調での推移が続いており、12月末は年初の水準である34バーツ台半ばから約1.3%のドル安・バーツ高となる34バーツ台前半で取引を終えている。

下落基調が続く中において、12月初旬には米11月雇用統計が堅調な結果だったことから盛り返す場面が見られたものの、その後のFOMCにてその勢いは打ち消された。同FOMCでは、公表されたドットチャートにおいて見通しが引き下げられ、2024年中の3回の利下げ見通しが示されたことに加え、パウエル議長からは利上げの停止とともに利下げの可能性が同時に示唆されたことで、FRBのハト派転換と捉えられ、ドル安が進行した。特にパウエル議長から利下げについて「視野に入っている」という発言が確認され、利下げに前向きな姿勢が示されたことは市場の想定以上のハト派転換であり、米早期利下げ観測が熾り続ける中、引き続きドルバーツ相場の重しとして機能する公算が大きいと考える。

一方で、タイ国内を見れば、先行き不透明感の強い要素は多い。デジタル通貨給付については財源や実行時期(現時点では5月実施予定)等、予断を許さない状況にある他、昨年の選挙における新首相選出の混迷により2024年度予算の成立が遅れ、年末の公共投資減少等の要因から国内経済にマイナスの影響が生じることも想定されている。また、観光セクターに関しては2023年11月の観光客数が約263万人と2023年の最高値を更新したものの、内訳を見ると増加しているのは米国やドイツ等、欧米諸国からの観光客であり、肝心の中国人観光客は前月対比微増に留まっている。中国人観光客の戻りにしにタイの本格的な観光セクター回復の実現は困難であり、タイ国政府観光庁が今年の中国人観光客数の目標を850万人とする中(2023年1-11月実績:約310万人)、その動向には引き続き留意が必要な状況にある。かかる状況下、タイ経済に対する不安要素が散見される中で、ドルバーツは安値圏での推移を予想するも、心理的節目である34バーツちょうどや直近安値である33バーツ台後半付近を目途に下落が一服する展開も想定している。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で人気のスポーツ事情』

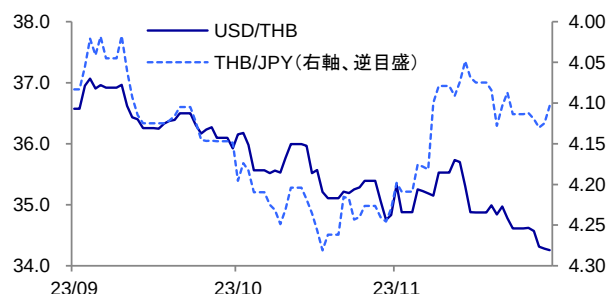
当地で最も人気のあるスポーツはサッカーである。これは様々なアンケートや調査でそのような結果が出ているし、当地に駐在した上での体感としても「そうなのだろう」と感じるところである。次いで人気があるのがバレーボール、バドミントン、ゴルフ等といったところだろうか。

ただ、当地スタッフに話を聞いてみると、積極的に上記スポーツをやっている、という人は少なく、どちらかというと、当地全体の健康意識の高まりからか、スポーツジムに行ったり筋トレをしたり、ジョギングや水泳をしているという人が多いように感じられる。特に筋トレについては、「出勤前の早朝等、隙あらばジムに行ったりトレーニングをしているよ」という話を複数人から聞くことができた。

当地の人々は食べるのが大好きで、気付けば何かを食べているような印象であったが、なるほど、そのような中でも体型を維持している人が多いのはこういった影の努力があるからなのだろう。赴任当初から抱き続けていた謎が解決すると同時に、魅力的なタイ料理の誘惑に負け続け、体重が驚くほどに増えている自分のふがいなさを痛いほどに感じた次第である。

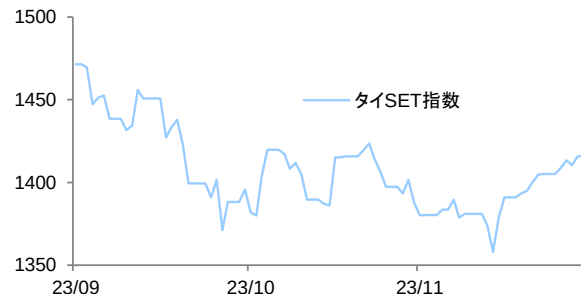
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/7	CPI YoY	11月	-0.30%	-0.44%	-0.31%
12/7	CPI コア YoY	11月	0.60%	0.58%	0.66%
12/7	消費者信頼感指数	11月	-	55.1	54.5
12/20	自動車販売台数	11月	-	61,621	58,963
12/25	輸出 (通関ベース) YoY	11月	5.00%	4.90%	8.03%
12/25	輸入 (通関ベース) YoY	11月	3.00%	10.10%	10.22%
12/25	貿易収支 (通関ベース)	11月	-\$600M	-\$2,400M	-\$832M

マレーシアリング相場

予想レンジ:	USD/MYR	4.55	～	4.68
	MYR/JPY	30.39	～	31.34
	JPY/MYR	3.19	～	3.29

マレーシアみずほ銀行 内田 壘

■ 先月の為替相場

先月のリングgit相場は、先月の見通し通り、海外イベントに振られる展開でやや値動きが荒く方向感に欠ける相場となった。

上旬については、14日の米FOMCを前に市場では積極的な売買が控えられ小幅なレンジでのみみ合いとなった。一方、植田日銀総裁の所謂チャレンジ発言に伴う早期の金融政策の正常化期待から円が急騰するとMYR/JPYは31円半ばを中心とした取引から30円後半まで値幅を伴って急落した。

中旬に入ると、米CPIやFOMCなど海外イベントに一喜一憂の展開。堅調な米雇用統計の結果や中国CPIのマイナス幅拡大を受けた人民元売りに加え、12日の米CPIでサービス価格のインフレ上昇が意識されUSD/MYRは4.71手前までドル買いが進行。一方、その後は14日FOMCがハト派寄りの結果と市場では捉えられ大きくドル売りに傾くなど不安定な値動きが続いた。

下旬については、いよいよクリスマスから年末相場で市場参加者が限定的となり、積極的な売買も回避され市場流動性が低下する中、ドル売りの流れが継続。USD/MYRは一時8月以来の4.6割れの水準まで値幅を伴って下落する展開となった。

2023年のリングgit相場を振り返ると、夏場以降、市場ではドル利上げの終焉を見極めながらの神経質な展開となったが、インフレ高止まりと堅調な労働市場を確認する中で、ドル売りに伴うリング買戻しは、11月以降に後ずれとなった。また、リング買戻しのスピード感にも掛ける相場動向が足許継続しており、リングの本格的な上昇トレンドは来年に持ち越しとなった。

■ 今月の見通し

昨年11月以降、市場でドル売り本格化の兆しが確認される中で今月も海外市場次第の相場展開が続きそうだ。

直近12/19に発表された11月貿易統計では、中国を始めとする主要国向け輸出に回復の兆候が確認されず。輸出企業によるMYR買いの実需フローは細っており、需給面でのリング上昇は未だ期待するのは厳しいと見る。また、24日に開催が予定されている馬中銀政策会合においても、国内インフレが着実に鈍化する状況下、馬中銀による金融政策の方向性は、インフレ抑制から景気支援に軸足を移すことになろう。つまり、リングの自律的な反発買いを期待できる材料は未だ揃っておらず、暫く米国金融市場を中心とした外部環境を見ながらの緩やかなリング買戻しが続くと考えている。

また、対円でのリング相場については、年初の能登半島地震を受けた日銀政策変更見通しの変化が注目となる。現在市場では、1-3月でのマイナス金利解除、夏場の利上げが織り込まれている。能登半島地震が日本経済全体に与える影響を見極めると共に、各政策会合での植田総裁のコメントを注目し、金融政策の微妙な変化にアンテナを張りたい。万一、金融緩和策解除時期の後ずれとなればドル高円安への巻き戻しも懸念される。MYR/JPYは再び31円台半ばを中心としたレンジへ逆戻りする可能性に十分注意しておきたい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

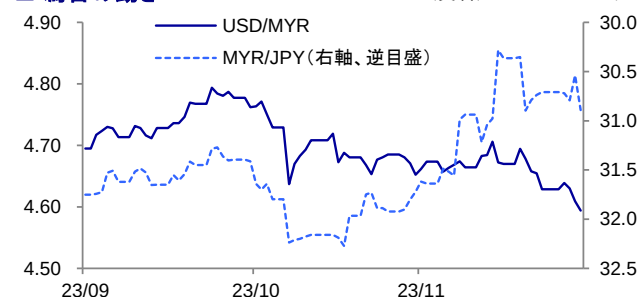
『当地で人気のスポーツ事情』

マレーシアで人気のスポーツは何ですか？日本人の駐在員に聞けば、ほぼ100%ゴルフと返ってくると思います。私個人としては余りのセンスの無さからゴルフは封印し道具は何も持たずに当地に赴任しましたが、周囲からのお誘いは定期的に頂く程、やはり日本人にとっては間違いなく人気スポーツです。気候的にもお値段的にも魅力的なのだと思います。一方、スポーツの歴史を振り返ってマレーシアのキーワードで思いつくのは“ジョホールバルの歓喜”。サッカーファンでなくても有名なワールドカップ本線出場を決めた歴史的勝利です。岡野選手が延長戦でゴールを決めた歓喜の瞬間は今でも鮮明に記憶に残っています。その後、日本人Jリーガーでは、元鹿島アントラーズの本山選手がマレーシアのプレミアリーグKelanatan Niteid FCで活躍した他、数多くの日本人選手がマレーシアサッカーリーグに在籍しています。尚、本山選手は今年4月に44歳という年齢で長い現役生活に終止符を打ちましたが、さすがの黄金79年組、今年11月に鹿島スタジアムで開催された引退試合には稲本選手や小野選手などの豪華メンバーが集結した他、多くのファンも本山選手の引退試合を観戦に訪れ、大いに盛り上がったとのこと。本山選手のマレーシアでの活躍は、今でもマレーシアでは有名な話であり、サッカーファンと話していると必ず話題に上がります。

マレーシアの国民的スポーツと言うとバドミントンが最初に出てくるスポーツだと思います。ただボール一つでちょっとしたスペースさえあれば楽しめるサッカーも是非マレーシアの国民的スポーツとなり、いつかワールドカップで日本代表がマレーシア代表と戦う姿を応援したいものです。

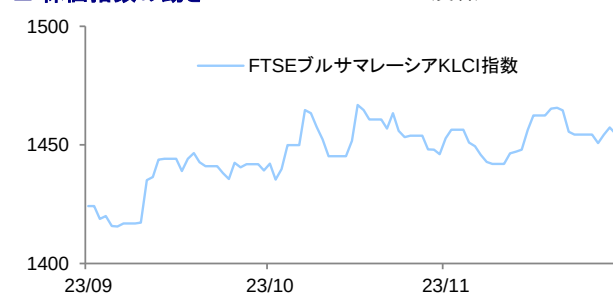
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/7	Foreign Reserves	3-Nov		\$112.3B	\$110.5B
12/11	Industrial production YoY	Oct	2.4%	2.7%	-0.5%
12/19	Exports YoY	Nov	-5.2%	-5.9%	-4.4%
12/19	Imports YoY	Nov	-0.6%	1.7%	-0.2%
12/19	Trade Balance MYR	Nov	16.54B	12.41B	12.87B
12/22	CPI YoY	Nov	1.70%	1.50%	1.80%
12/22	Foreign Reserves	15-Dec		\$112.8	\$112.3B

インドネシアルピア相場

予想レンジ:

USD/IDR	15250	～	15700
IDR/JPY	0.8929	～	0.9434
JPY/IDR	106.00	～	112.00

(注) 100インドネシアルピアあたりの対円レート

アジア・オセアニア資金部 網島 正侑記

■ 先月の為替相場

12月のルピアは小幅上昇。月初1日、ドルルピアは15500台前半で取引を開始。この日発表されたインドネシア11月CPIの結果は事前の予想を小幅に上回るも市場の反応は限定的となった。海外時間に行われたパウエル議長講演はハト派的と受け止められドル売りが優勢となると翌週4日アジア時間のドルルピアは15400近辺までドル売りが進展した。しかしながら同水準ではドル買い意欲も見られ午後にかけてはルピアは対ドルで反落し、翌5日にかけて15500近辺まで対ドルで下落した。その後は8日海外時間に予定される米雇用統計へ注目が集まる中、様子見ムードが強まり15500を中心とした狭いレンジ内での揉み合いが継続した。8日、海外時間に発表された米11月雇用統計の結果は市場予想を小幅に上回る結果となり、翌週11日アジア時間のドルルピアは15500台前半まで小幅にルピア安が進展して取引を開始させた。その後、15600台前半までルピアは下落幅を拡大させたが、週央に米CPI、FOMC会合の発表を控え様子見ムードが強まる中で15600近辺での推移が継続した。12日海外時間に発表された米11月CPIの結果は市場予想を小幅に上回る結果となり、ドル高が優勢となると13日アジア時間には一時15600台後半までルピアは下落幅を拡大させた。13日海外時間に発表されたFOMC会合の結果では、事前の予想通り金利の据え置きが決定された一方、インフレ見通しが下方修正されたほか、2024年中に3回分の利下げが見通される等ハト派な結果となると米金利低下・ドル安の流れとなり、翌14日には一時15400台後半までルピア高が進展した。ドル売り一巡後は15500近辺まで値を戻し、休暇シーズンが近づくと、同水準での推移が継続した。21日、インドネシア中銀会合において、政策金利の据え置きが決定されたが、事前の予想通りであり反応は限定的となった。22日海外時間に発表された米PCEデフレータの結果が市場予想を下回る結果となると連休明けとなる27日にはドル売りが再度強まりドルルピアは一時15300台後半までルピア高が進展し、月末にかけて15400近辺での値動きが継続した。

■ 今月の見通し

1月のルピアは軟調な値動きを予想。米利下げ織込みが進展しており米金利市場では早ければ3月会合での利下げ、2024年内では計6回の利下げを織り込んでいる状況。一方で、12月FOMC会合にて発表された2024年末時点の政策金利予想(ドットチャート中央値)は年内利下げ3回となっており、市場参加者と当局者との見通しには乖離がある。今年中に利下げへ転換するとの見方に違和感はないものの、足元で米国のCPIは3%を超えている状況が継続しており、物価目標である2%からは依然として乖離している状況が継続している。物価目標を1%以上上回っている状況下で利下げへ動くとは考えにくく、市場の織込みすぎた利下げ期待が剥落し米金利上昇・ドル高の局面が来る可能性は十分にあると考える。一方、インドネシアの11月の貿易収支の結果は市場予想を下回る結果となった。貿易収支の黒字幅が縮小している状況下、Q3に続きQ4の経常収支も赤字が継続するものと予想され、実需の面からルピアが売られやすい環境が継続しているものと考えられる。ドル買い戻しの流れに実需のルピア売りが拍車をかける可能性もあろう。足元で進展しているドル安・ルピア高の流れに水が差される展開に注意したい。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地で人気のスポーツ事情』

【バドミントン】

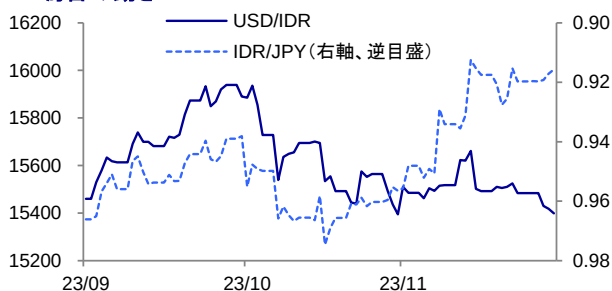
バドミントンは当地で最も愛されているスポーツの1つです。さまざまなレベルでプレーされているこのスポーツは幅広い賞賛を集めています。インドネシア・オープンは地域のバドミントンカレンダーのハイライトであり、トップ選手と大勢の観衆が集まります。伝説的なオリンピック選手であるスシ・スサンディは、数々のタイトルと功績によって国民に計り知れない誇りをもたらしてきました。トーマスカップやスーパーカップなどのバドミントンの国際イベントにおけるインドネシアの優位性は、この国の実力を示しています。このような豊かな遺産と重要な文化的重要性により、バドミントンは当地で最高の地位を保ち続けています。

【サッカー】

世界的にあまり強くないものの(国際サッカー連盟FIFAランキング173位)、フットサルを含む、全国的にサッカーが人気のスポーツです。人気の理由の一つは、ボール一つで誰でも参加する事が出来るからです。町を歩いていてもわかります。夕方の横丁を歩けば、ちょっとした空き地で子どもたちがサッカーボールを蹴ったり、ミニゲームをしたりしているのをいたるところで見かけます。また、観るスポーツとしてのサッカーは、もはや国民的スポーツとも言えるほどに人気を博しています。ワールドカップなど国際大会の時期になると、周囲の話題が変わります。どの国の代表チームを応援するか、どの選手を注目するか、また、どのチームが優勢するかを予想したりします。決戦試合に近づくと、あちこちで試合観戦が開催されます。レストランやホテルなどはもちろん、開催する国によって、当時との時間差が変わってきますが、今年アジアカップを開催するカタールとの時間差は約4時間で、比較的小さいので、試合の生放送を観戦するのはちょうどよい時間なので、近所まで一緒に試合観戦を堪能したいです。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/1	CPI(前年同月比)	11月	2.70%	2.86%	2.56%
12/15	貿易収支(USD M)	11月	2,970	2,412	3,480
12/15	輸出(前年比)	11月	-9.52%	-8.56%	-10.43%
12/15	輸入(前年比)	11月	-0.19%	3.29%	-2.42%
12/21	BI 金利	-	6.00%	6.00%	6.00%

フィリピンペソ相場

予想レンジ: USD/PHP 54.50 ~ 56.50
JPY/PHP 0.380 ~ 0.405

アジア・オセアニア資金部 マニラ室 榎 雄一郎

■ 先月の為替相場

米金融当局者によるタカ派発言を受けたドル上昇から、ペソは下落して月の取引を開始するも、原油先物価格の下落や11月の比製造業PMIが52.7と前月の52.4から拡大したことを追い風に、ペソ買い戻し優勢となり、水準を戻した。その後は11月の比消費者物価指数が前年比+4.1%と前月の+4.9%から鈍化となったが、比中銀は安定的にインフレが鈍化するまではタカ派姿勢を維持するとしたことが支援材料となりペソは底堅く推移し、上旬は11月下旬からの1米ドル＝55.25～55.50ペソのレンジ推移継続となった。

中旬に入り、予想対比強めの米雇用統計や米消費者物価指数の上振れを受けた、早期利下げ観測後退のほか、比政府が2024年の経済成長目標の下方修正に言及したことを受けてペソは下げを拡大し、13日には約1か月ぶりの1米ドル＝56ペソ台までペソ安が進行。その後、想定以上にハト派なFOMCを受けた大幅ドル安から、ペソは急反発。比中銀は大方の予想通り2会合連続で政策金利を据え置きを決定したが、特段材料視されず。10月の比海外在留労働者からの送金が堅調な伸びを示し、ペソは一段高となる局面が見られたが、米金融当局者らから早期利下げ期待をけん制する発言が相次ぎ、ドル反発となりペソは1米ドル＝56ペソ台まで再度下落するなど、中旬は値動きの激しい展開となった。

比中銀のレモナ総裁がインフレ圧力が根強い中、当面の利下げに否定的な見方を示したことにペソはサポートされたほか、米金融当局者からのタカ派発言が続くも米利下げ観測を背景とした、ドル安地合継続からペソ反発となった。しかしながら、直近ペソ高水準の1米ドル＝55.25ペソ付近では上値が重く、高値警戒感からペソ売り優勢となるなど、11月下旬～12月上旬のレンジをブレイクするには至らず、1米ドル＝55.370ペソで月の取引を終え、月間ベースでは往って来いの展開となった。

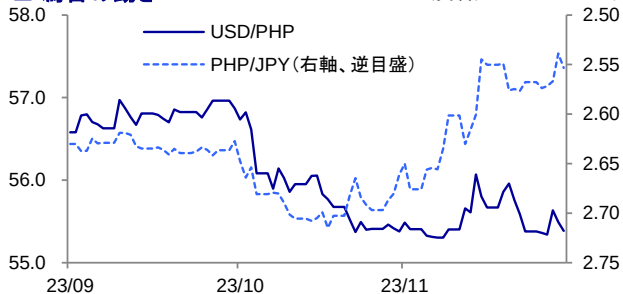
■ 今月の見通し

FOMCでは当局がインフレ鎮静化への自信を深めており、参加者の政策金利予測の中央値では来年3回の利下げを見込んでいることが示され、前回9月時点の2回の予測よりも利下げペースが速まったほか、パウエル議長は利下げ開始時期がいつ適切になるかについて今回議論したことを認めるなど、明確にハト派トーンとなり、当局の方向転換が示された。また、パウエル議長は市場の利下げ期待を牽制せず、当面は利下げがあるかどうかではなく、いつあるかが市場の焦点となり、利下げ期待が高まっている状況下、当面は利下げ期待が大きく解消する可能性は低く、ドル安モメンタムが続くであろう。一方で、足元の米経済回復力と金融環境の緩和を踏まえると、政策緩和を急ぐ必要性は高くないとも考えられ、金利低下を受けた物価上昇圧力再燃といった懸念も踏まえると、当局の政策金利予想に対して行き過ぎた市場の折り込みが修正される過程で、ドルが持ち直す展開も想定される。

フィリピン中銀はインフレ鈍化を受けて、政策金利据え置きを決定するも、物価上昇リスクが残るなか、引締め政策を維持するとした。米国に先行して利下げに政策転嫁する可能性は低く、経済環境も底堅いとの認識であり、当面はタカ派的据え置きを維持する可能性が高いが、ドル主導の相場の中、ドルペソ為替相場は米政策金利バスに対する見方に振られるボラティルな展開となろう。また、輸出減少を主要因に、高水準の貿易赤字が継続しているほか、海外在留労働者からの送金の季節性が今後は剥落していくこと、加えて、米当局の方向転換からリスクアセットが上昇し、原油価格が上昇する可能性も高く、需給面ではペソは売られやすい環境となり、ペソの上値を抑える要因となろう。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日 イベント
上記参照

(資料) ブルームバーク

期間	予想	結果	前回

インドルピー相場

予想レンジ: USD/INR 82.90 ~ 83.80
INR/JPY 1.67 ~ 1.79

アジア・オセアニア資金部 インド室 綿引 修平

■ 先月の為替相場

【12月の米ドル/インドルピーは節目83水準で底堅い推移】

83台前半水準にて当月取引を開始。月初については、インド7～9月期GDPが良好な結果となったことでギャップダウンして始まったものの、その後はフロー主導で値を取り戻す展開に。その後は、上値の重い展開が継続したものの、月央にはFOMCにおけるハト派な結果が出されたことで、節目の83ルピー水準を下回る局面も見られた。月末にかけては、インド準備銀行(RBI)からの下支えの為替介入および大口フローも散見されたことで徐々に値を戻し、結局、月初水準からは小幅にルピー高水準でのクローズとなった(22日時点)。

SENSEXは、上昇圧力が顕著な状況となり、71,000水準を超える水準まで上値を伸ばし、年初来高値を更新した。良好なGDPの結果と来年の選挙の前哨戦となる州選挙にてモディ陣営が勝利したことや、RBIのGDP見通しの上方修正も好感した様相か。

インド経済指標では、11月製造業/サービス業PMIは強弱ミックスの結果に。注目された12月金融政策委員会(MPC)は、5会合連続となる政策金利据え置き(6.50%)を実施。一方、政策スタンス(インフレ退治に向けた利上げ路線継続)は、不変のままとした。11月消費者物価指数(CPI、前年比)は、+5.55%と前回の+4.87%から上昇したものの、インフレターゲット上限である+6%には至らなかった。11月貿易収支は赤字幅は縮小したものの赤字常態化は継続、通貨として売られやすい立ち位置は変わっていない。

■ 今月の見通し

【1月の米ドル/インドルピーは緩やかなルピー安レンジシフトか】

1月においては、節目83水準から緩やかなルピー安の展開を見込む。12月は、節目である83水準を小幅に下回る局面も散見されたものの、同水準からはRBIからの下支えの為替介入もしっかり発動されており、節目83水準の死守姿勢も垣間見えたと感じる。こもとのUSD売り圧力で、他通貨では対USDで通貨高となる一方で、ルピー安の流れは継続しており、従来レンジの82～83レンジから83～84レンジへの緩やかなルピー安レンジシフトを視野に入れておきたい。

12月MPCでは、政策金利6.50%の据え置きを実施。足元、一時的に急騰したCPIも落ち着きを見せており、利上げ効果の見極めフーズに入った印象。一方、政策スタンスは不変の利上げ路線継続も示しており、CPIが再度インフレに傾く局面では、躊躇なく利上げという選択肢も含んだ恰好か。

来年以降、インド国債組み入れに伴う資金流入の加速や米経済の失速・利下げ局面となれば、来年後半に向けてルピー高の流れが顕在化する方向感で見ておくが、その際はRBIからの下支えの為替介入や実需勢からのアウトフロー(インドルピー売り)により、緩やかにダイレクションはルピー安方向に回帰していく想定を、中長期的には控えておきたい。

一方で、IMFの年次4条協議の報告書が公表され、RBIによる為替介入に関する議論がなされた模様で、無秩序な市場の動きに対処するために必要な水準を超えている可能性が高いと、批判を表明している。RBIがIMFの意見を素直に受け入れるとは想定されないが、今後、グローバルな目線感や圧力がかかる際は、安定化ツールの為替介入姿勢に変化が訪れる可能性もあり、要警戒しておきたい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で人気のスポーツ事情』

インドといえば、クリケット。史上最も偉大なプレイヤーといわれるサチン・テンドルカル(50、すでに引退)の資産は約180億円で、インドのみならず世界で最も稼いだクリケット選手だ。

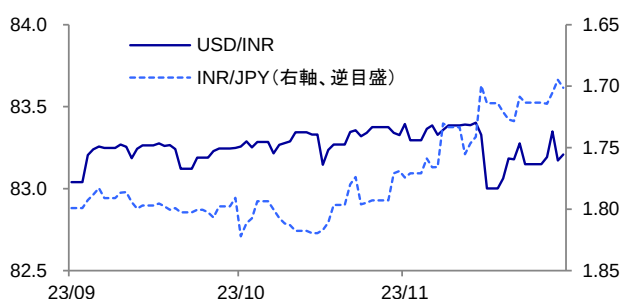
住宅街の空き地や路上では、日本のキャッチボールの風情で少年たちが簡易クリケットに興じている。レンガを積み上げてゲートを作りさえすれば、クリケット遊びは成立するのだ。また、おじさん達がチャイ屋でたむろして喋っている中で、おもむろにクリケットの投球ポーズを始める人がいたりする。あたかも傘で素振りをするようなものだ。

2020年の新型コロナ第一波では、インド政府主導で外出禁止が言い渡された。筆者の住む団地でもウォーキングを慎むように通知され、生鮮品の調達以外では外に出ないようにした。やがて外出禁止が解除されると、子どもや大人が敷地内の路上でバドミントンをする姿をよく見るようになった。バドミントンなら二人から成立するし、ソーシャルディスタンスも取りやすい。日系のラケット製造会社も、この時期は大変忙しかったそうだ。

再びクリケット遊びを見るようになって久しく、当地ではパンデミックが遠い過去になりつつあることを実感する。(バンガロール 木原志乃)

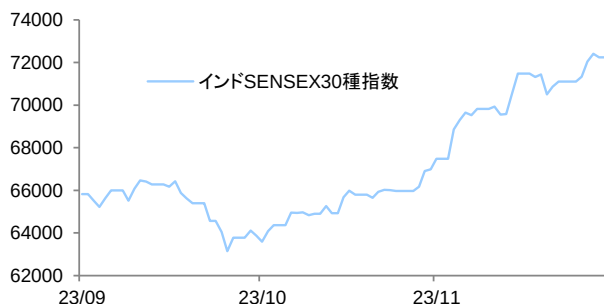
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

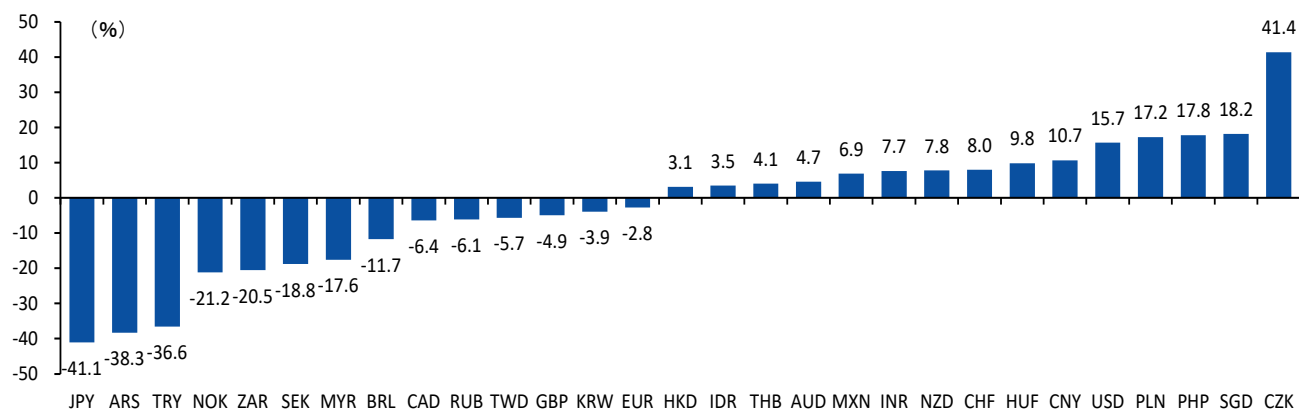
発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/1	製造業PMI	11月	-	56.0	55.5
12/5	サービス業PMI	11月	-	56.9	58.4
12/8	政策金利	12月	6.50%	6.50%	6.50%
12/12	鉱工業生産	10月	10.50%	11.70%	6.20%
12/12	CPI	11月	5.78%	5.55%	4.87%
12/15	貿易収支(百万ドル)	11月	-24,500	-20,587	-31,460

■ 為替市場・株式市場騰落率

	為替市場	2022年末	2023年12月末	騰落率	株式市場	2022年末	2023年12月末	騰落率	USD換算
先進国									
米国	-	-	-	-	NYダウ平均	33147.25	37689.54	13.7%	-
日本	USD/JPY	131.12	141.04	7.6%	日経平均株価	26094.5	33464.17	28.2%	19.2%
ユーロ圏	EUR/USD	1.0705	1.1039	3.1%	ドイツDAX指数	13923.59	16751.64	20.3%	20.3%
英国	GBP/USD	1.2083	1.2731	5.4%	ロンドンFTSE 100指数	7451.74	7733.24	3.8%	-1.5%
豪州	AUD/USD	0.6813	0.6812	0.0%	S&P/ASX200指数	7038.688	7590.818	7.8%	7.9%
カナダ	USD/CAD	1.3554	1.3243	-2.3%	S&PTロント総合指数	19384.92	20958.44	8.1%	10.7%
エマージングアジア									
中国	USD/CNY	6.8986	7.1	2.9%	上海総合	3089.258	2974.935	-3.7%	-6.4%
香港	USD/HKD	7.8016	7.8115	0.1%	香港ハンセン	19781.41	17047.39	-13.8%	-13.9%
インド	USD/INR	82.735	83.2088	0.6%	インドSENSEX30種	60840.74	72240.26	18.7%	18.1%
インドネシア	USD/IDR	15573	15399	-1.1%	ジャカルタ総合	6850.619	7272.797	6.2%	7.4%
韓国	USD/KRW	1260.33	1291.07	2.4%	韓国総合株価	2236.4	2655.28	18.7%	15.9%
マレーシア	USD/MYR	4.4045	4.594	4.3%	ブルサマレーシアKLCI	1495.49	1454.66	-2.7%	-6.7%
フィリピン	USD/PHP	55.741	55.385	-0.6%	フィリピン総合	6566.39	6450.04	-1.8%	-1.1%
シンガポール	USD/SGD	1.3395	1.3203	-1.4%	シンガポールST	3251.32	3240.27	-0.3%	1.1%
台湾	USD/TWD	30.73	30.579	-0.5%	台湾加権	14137.69	17930.81	26.8%	27.5%
タイ	USD/THB	34.608	34.256	-1.0%	タイSET	1668.66	1415.85	-15.2%	-14.3%

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 実質実効為替レート(REER)の1994年以降の平均からの乖離(2023年11月時点)



■ 実質GDP成長率

	2022Q2	2022Q3	2022Q4	2023Q1	2023Q2	2023Q3	2023Q4	2022	2023
	(前年比%、*前期比年率%)							(前年比%)	
先進国									
米国*	-0.6	2.7	2.6	2.2	2.1	4.9		1.9	
日本*	4.4	-0.4	1.0	5.0	3.6	-2.9		1.0	
ユーロ圏	4.1	2.4	1.8	1.3	0.6	0.0		3.4	
英国	3.9	2.1	0.6	0.4	0.3	0.3		4.3	0.3
豪州	3.5	5.8	2.3	2.4	2.0	2.1		3.8	
カナダ*	3.8	1.8	-0.9	2.5	1.4	-1.1		3.8	
エマージングアジア									
中国	0.4	3.9	2.9	4.5	6.3	4.9		3.0	
香港	-1.2	-4.6	-4.1	2.9	1.5	4.1		-3.5	
インド	13.1	6.2	4.5	6.1	7.8	7.6		9.1	7.2
インドネシア	5.5	5.7	5.0	5.0	5.2	4.9		5.3	
韓国	2.9	3.2	1.4	0.9	0.9	1.4		2.6	1.4
マレーシア	8.8	14.1	7.1	5.6	2.9	3.3		8.7	
フィリピン	7.5	7.7	7.1	6.4	4.3	5.9		7.6	
シンガポール	4.5	4.0	2.1	0.5	0.6	1.0	2.8	3.7	1.2
台湾	3.5	4.0	-0.7	-3.5	1.4	2.3		2.6	
タイ	2.5	4.6	1.4	2.6	1.8	1.5		2.6	1.5

(注)インドの年間成長率は会計年度(4～3月)。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 失業率

	23/04	23/05	23/06	23/07	23/08	23/09	23/10	23/11	2022	2023
	(%)								(%)	
先進国										
米国	3.4	3.7	3.6	3.5	3.8	3.8	3.9	3.7	3.6	3.7
日本	2.6	2.6	2.5	2.7	2.7	2.6	2.5	2.5	2.6	2.6
ユーロ圏	6.5	6.5	6.5	6.6	6.5	6.5	6.5		6.7	6.5
英国	3.8	4.0	4.2	4.3					3.7	4.0
豪州	3.7	3.6	3.5	3.7	3.7	3.6	3.8	3.9	3.7	3.6
カナダ	5.0	5.2	5.4	5.5	5.5	5.5	5.7	5.8	5.3	5.3
エマージングアジア										
中国										
香港	3.0	3.0	2.9	2.8	2.8	2.8	2.9	2.9	4.3	3.0
インドネシア									5.9	5.5
韓国	2.6	2.5	2.6	2.8	2.4	2.6	2.5	2.8	2.9	2.6
マレーシア	3.5	3.5	3.4	3.4	3.4	3.4	3.4		3.8	3.5
フィリピン	4.5	4.3	4.5	4.8	4.4	4.5	4.2		5.4	4.6
シンガポール	1.8	1.9	1.9	2.0	2.0	2.0	1.9		2.1	1.9
台湾	3.6	3.5	3.5	3.4	3.4	3.4	3.4	3.4	3.7	3.5
タイ			1.1							

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 消費者物価上昇率

	23/03	23/04	23/05	23/06	23/07	23/08	23/09	23/10	23/11	2022	2023
	(前年比%)									(前年比%)	
先進国											
米国	5.0	4.9	4.0	3.0	3.2	3.7	3.7	3.2	3.1	8.0	4.2
日本	3.2	3.5	3.2	3.3	3.3	3.2	3.0	3.3	2.8	2.5	3.3
ユーロ圏	6.9	7.0	6.1	5.5	5.3	5.2	4.3	2.9	2.4	8.4	5.7
英国	10.1	8.7	8.7	7.9	6.8	6.7	6.7	4.6	3.9	9.1	3.9
豪州	7.0			6.0			5.4			6.6	6.1
カナダ	5.2	4.3	4.4	3.4	2.8	3.3	4.0	3.8	3.1	6.8	3.9
エマージングアジア											
中国	0.7	0.1	0.2	0.0	-0.3	0.1	0.0	-0.2	-0.5	2.0	0.3
香港	1.7	2.1	2.0	1.9	1.8	1.8	2.0	2.7	2.6	1.9	
インド	5.7	4.7	4.3	4.9	7.4	6.8	5.0	4.9	5.6	6.7	
インドネシア	5.0	4.3	4.0	3.5	3.1	3.3	2.3	2.6	2.9	4.2	3.7
韓国	4.2	3.7	3.4	2.7	2.4	3.4	3.7	3.8	3.3	5.1	3.6
マレーシア	3.4	3.3	2.8	2.4	2.0	2.0	1.9	1.8	1.5	3.4	
フィリピン	7.6	6.6	6.1	5.4	4.7	5.3	6.1	4.9	4.1	5.8	6.2
シンガポール	5.5	5.7	5.1	4.5	4.1	4.0	4.1	4.7	3.6	6.1	3.6
台湾	2.4	2.4	2.0	1.8	1.9	2.5	2.9	3.1	2.9	3.0	
タイ	2.8	2.7	0.5	0.2	0.4	0.9	0.3	-0.3	-0.4	6.1	1.5

(注)豪州は四半期データ。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 経常収支

	2022Q1	2022Q2	2022Q3	2022Q4	2023Q1	2023Q2	2023Q3	2022	2023
	(対GDP比%)							(対GDP比%)	
先進国									
米国	-3.8	-3.9	-3.8	-3.7	-3.4	-3.2	-3.1	-3.8	
日本	3.6	3.0	2.3	1.9	1.5	2.0	2.9	1.9	
ユーロ圏	2.1	1.0	-0.2	-0.6	-0.4	0.2	1.3	-0.6	
英国	-2.3	-3.5	-3.3	-3.1	-1.8	-1.8	-2.0		
豪州	2.2	1.8	0.8	1.1	1.3	1.2	1.2	1.1	
カナダ	0.2	0.3	-0.1	-0.4	-0.7	-1.1	-0.9	-0.4	
エマージングアジア									
中国	2.0	2.1	2.4	2.4	2.2	2.2	1.8	2.2	
香港	12.6	10.9	11.6	10.5	8.9	9.3	8.5	10.0	
インド	-1.2	-1.9	-2.6	-2.4	-2.0	-1.7	-1.0	-2.4	
インドネシア	0.4	0.9	0.8	1.0	1.2	0.7	0.3	1.0	0.2
韓国	4.6	4.1	2.9	1.9	0.6	0.5	1.2	1.8	
マレーシア	3.4	2.7	2.5	3.1	3.0	3.3	2.8	3.1	
フィリピン	-2.8	-4.6	-5.9	-4.6	-4.5	-3.3	-2.5	-4.4	
シンガポール	19.8	20.1	20.3	19.3	18.8	18.5	18.0	19.3	19.1
台湾	15.6	14.9	14.2	13.4	12.1	11.9	12.4	13.4	
タイ	-2.1	-3.1	-3.7	-3.2	-2.3	-1.4	1.2		

(注)インドの年間経常収支は会計年度(4～3月)。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 世界の政策金利

		現在 (%)	政策転換期		最近の政策変更		直近の政策動向	
			日付	水準 (%)	日付	変更幅	日付	決定事項
先進国								
米国	FFレート誘導目標	5.25-5.50	引き締め: 2022/3/16	0.00-0.25	2023/7/26	+25bp	2023/12/13	現状維持
日本	当座預金残高の政策金利	-0.10	緩和: 2008/10/30	0.30	2016/1/29	-20bp	2023/12/19	現状維持
ユーロ圏	預金ファシリティレート	4.00	引き締め: 2022/7/21	-0.50	2023/9/14	+25bp	2023/12/14	現状維持
英国	バンク・レート	5.25	引き締め: 2021/12/16	0.10	2023/8/3	+25bp	2023/12/14	現状維持
豪州	キャッシュ・レート	4.35	引き締め: 2022/5/3	0.10	2023/11/7	+25bp	2023/12/5	現状維持
カナダ	翌日物金利	5.00	引き締め: 2022/3/2	0.25	2023/7/12	+25bp	2023/12/6	現状維持
エマージングアジア								
中国	1年物最優遇貸出金利(LPR)	3.45	緩和: 2012/6/8	6.31	2023/8/21	-10bp	2023/12/20	現状維持
インド	翌日物レポ金利	6.50	引き締め: 2022/5/4	4.00	2023/2/8	+25bp	2023/12/8	現状維持
インドネシア	BI金利	6.00	引き締め: 2022/8/23	3.50	2023/10/19	+25bp	2023/12/21	現状維持
韓国	7日物レポ金利	3.50	引き締め: 2021/8/26	0.50	2023/1/13	+25bp	2023/11/30	現状維持
マレーシア	翌日物金利	3.00	引き締め: 2022/5/11	1.75	2023/5/3	+25bp	2023/11/2	現状維持
フィリピン	翌日物金利	6.50	引き締め: 2022/5/19	2.00	2023/10/26	+25bp	2023/12/14	現状維持
タイ	翌日物レポ金利	2.50	引き締め: 2022/8/10	0.50	2023/9/27	+25bp	2023/11/29	現状維持
ベトナム	リファイナンス金利	5.00	緩和: 2023/3/31	6.00	2023/5/23	-50bp	2023/5/23	-50bp

(注) インドネシア中銀は2023年12月21日に政策金利を7日物リバースレポレートからBI金利に変更

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行